

紀伊國名所圖會

五之卷  
海上郡





紀伊國名所圖會卷之五

先福寺  
中言神社  
身代地藏  
金藏院  
金剛寶寺  
宗祇坊  
布衣松  
琴の浦  
明見社  
篁の島  
産神座

大宅の松  
大日堂  
明見社  
塩籠  
名産西瓜  
沖釣座  
春日林法  
松尻の鼻  
中言神社

小雑貨  
汐見橋  
装束の松  
若宮権宮  
名所の濱  
濱の宮  
沖釣観音  
船尾  
内濱  
黒江沖坊

雑貨川  
三島嶺  
福壽院  
午頭天王祠  
名所の浦  
紙の文回宅  
吾溜ち  
大野の全圖  
祐道基



黒牛宿 龕堂 若宮幡宮 沖門の町 桑田神社 松代王子 城趾 車若丸泉

黒江梳 城趾 池の谷 高里神社 城趾 三上山 延今寺 衣笠山 鏡岩 鬼城大岩 菩提寺 正八幡宮

月挽物の圖 于汚浦 永正寺 阿弥陀寺 徳道院 春日神社 百州明神 十二所槍次社 神宮寺

荒池 大杉寺 写村 大野坂 神宮寺 称名寺 願成寺 下居神社 堂の跡寺 新遊寺 宇野辺宅趾

大野 名ま浦 地藏堂 八神社 後戸王子 市霊神社 亀井八郎宅趾 中送寺 筆持松 水屋後ち 親善寺

廃釈如寺 紫川 名ま川 船津沖茶 浄土寺 親善寺 友白浦 友白松 比良山 後津湊 神宮寺

大空城趾 井松原 生念寺 柳舟戸 藤白墨 友白王子社 友白屋敷 了賢寺 安綱の圖

山名堂 井安の表 廣極楽寺 一乃舟の跡 亀井の泉 友白の沖坂 蛭子神社

三所槍次社 沖門の町 桑田神社 松代王子 城趾 車若丸泉

月挽物の圖 于汚浦 永正寺 阿弥陀寺 徳道院 春日神社 百州明神 十二所槍次社

下居神社 堂の跡寺 新遊寺 宇野辺宅趾

浄土寺 親善寺 友白浦 友白松 比良山 後津湊 神宮寺

了賢寺 安綱の圖

流水杳無際  
 片殘華逐何如  
 碧玉閒條然  
 羣玉后隱聰題

壽日山地藏院先福寺

手平村にある福寺  
 本寺宇布地藏菩薩  
 隆作あり

大師堂

法大師の作と云ふは  
 支那善法大師の流法一か  
 支那善法大師の流法一か  
 支那善法大師の流法一か

大宅の松

日村後本昌寺畑にあり  
 日村後本昌寺畑にあり  
 日村後本昌寺畑にあり

小雑賀

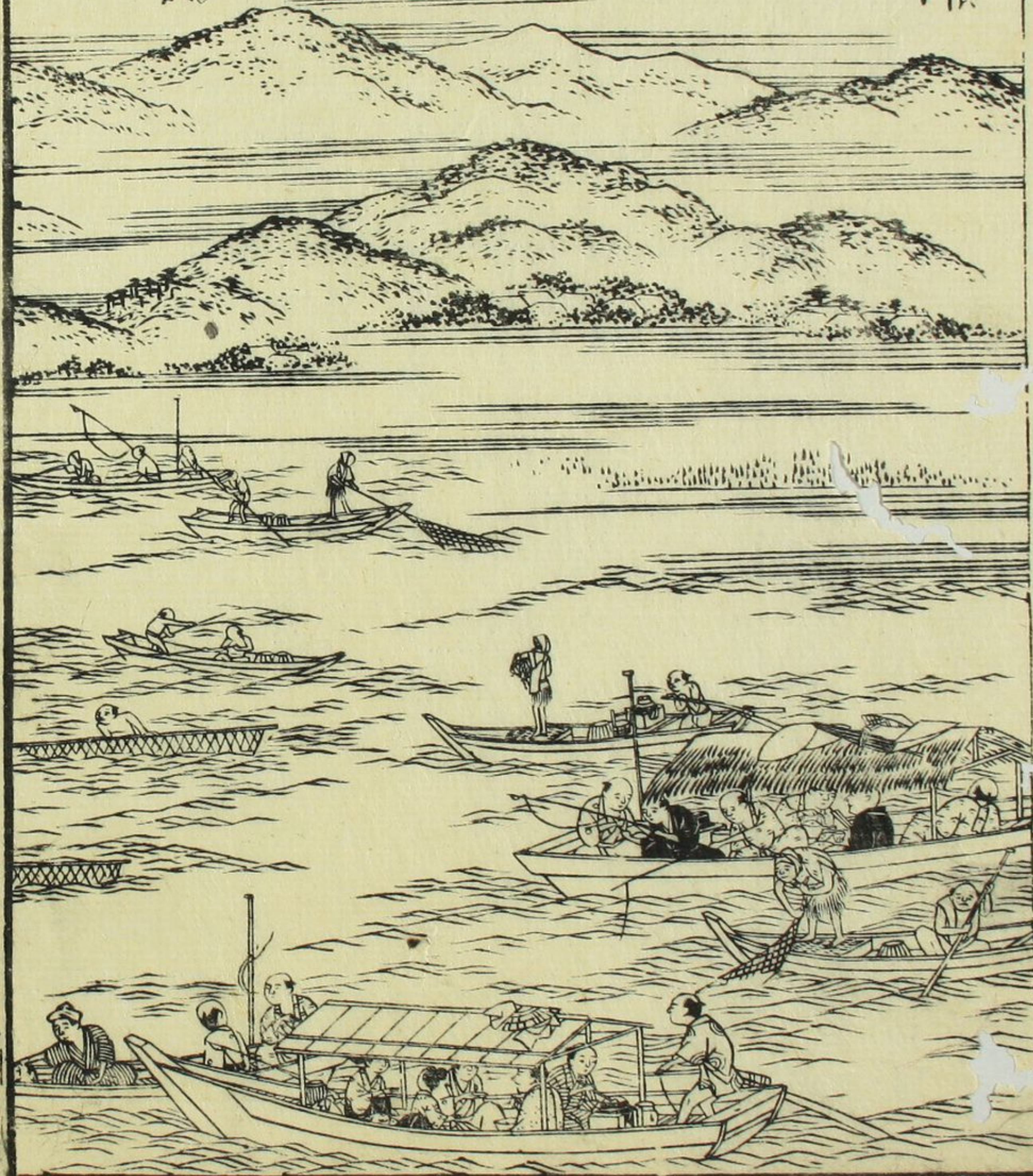
宇治川と小南にあり  
 宇治川と小南にあり  
 宇治川と小南にあり

雑賀川

の諸人般すも暑風を  
 秋の夕暮のほらに嘆  
 結い付く中流に  
 魚をゆるぎぬ  
 白きくさくさ  
 中秋の月生石

雜  
賀  
川

川  
舟  
也  
焚  
付  
紫  
小  
紅  
若  
山  
画  
誰



沒  
船  
和  
歌  
浦  
次  
男  
弘  
美  
韻  
扁  
舟  
一  
棹  
弱  
浦  
隈  
多  
少  
風  
光  
豈  
易  
裁  
偃  
浪  
彩  
虹  
橋  
樣  
絕  
書  
空  
斜  
雁  
字  
行  
開  
欲  
撈  
未  
貝  
底  
深  
淺  
將  
伴  
白  
鷗  
岸  
去  
來  
無  
限  
烟  
波  
目  
紗  
々  
坐  
思  
帝  
子  
意  
悠  
哉  
先  
崖  
弘  
毅  
剛  
熊  
野









明見社  
 明見山  
 春日社  
 横待所  
 紀井寺  
 前

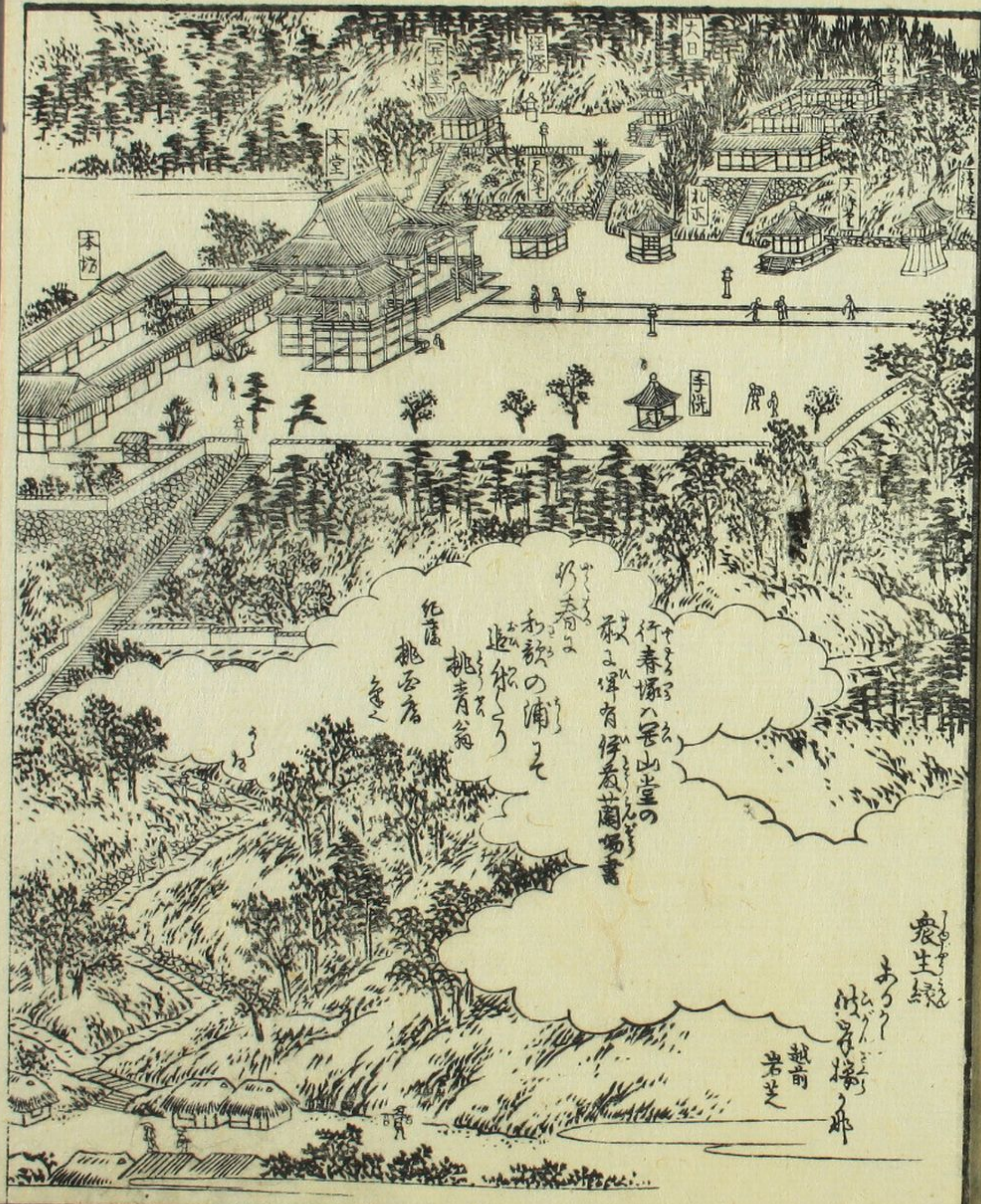
杉侍の  
 萩  
 去番

紀三井山護國院金剛寺  
 本寺十一面觀世音  
 秘龕千手觀世音  
 洞山堂  
 鎮守祠  
 札納半  
 大師堂  
 常念堂  
 三瀑泉  
 階前懸溜遠秀臺  
 鬼工手仙家十二小透茶  
 二王門  
 禁殺生碑石

名義山の半服にあり  
 古義真言宗  
 洞山堂上人一か三の作  
 秘龕上人千手觀世音の  
 二重塔  
 鎮守祠  
 札納半  
 大師堂  
 常念堂  
 三瀑泉  
 階前懸溜遠秀臺  
 鬼工手仙家十二小透茶  
 二王門  
 禁殺生碑石

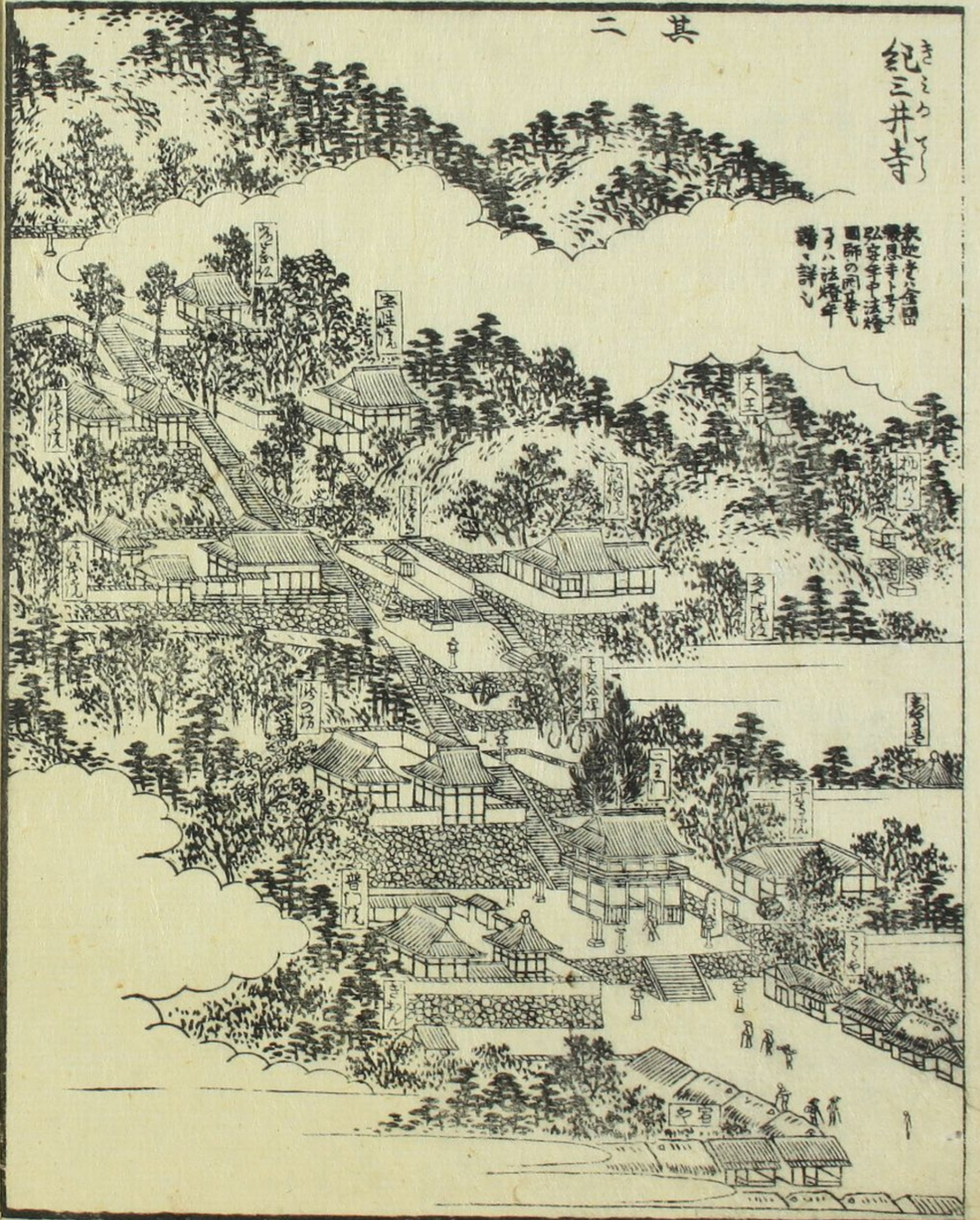
南と杉侍の  
 中と三瀑泉  
 北と二王門  
 西と洞山堂  
 東と秘龕





行春塚八雲山堂の  
 寂子母有伊左衛門書  
 和歌の浦  
 桃青翁  
 桃石居  
 色之

衆生録  
 あり  
 竹亭  
 岩芝



其二  
 紀三井寺

本寺は金田  
 宗信寺トモ  
 公安寺トモ  
 圓師の同寺  
 子ハ法燈平  
 等ト詳シ

世  
 中  
 寺  
 山  
 堂  
 院  
 坊  
 塔  
 石  
 燈  
 籠  
 鐘  
 樓  
 講  
 堂  
 僧  
 房  
 寮  
 門  
 衛  
 門  
 橋  
 池  
 井  
 石  
 燈  
 籠  
 鐘  
 樓  
 講  
 堂  
 僧  
 房  
 寮  
 門  
 衛  
 門  
 橋  
 池  
 井



應同樹

平坊の境内にあり... 山有藥樹名應同樹傳是自宮得來每歲七月海又... 家集

本坊護国院

内帶平坊... 寺果報院建立の家あり... 雪のさきわすなりなり 市室所

海龍院

平坊土師の境内にあり... 平坊土師の境内にあり... 照檀

宝藏院

平坊土師の境内にあり... 照檀

大師堂

平坊土師の境内にあり... 照檀

普門院

平坊土師の境内にあり... 照檀

大師堂

平坊土師の境内にあり... 照檀

松樹院

平坊土師の境内にあり... 照檀

大師堂

平坊土師の境内にあり... 照檀

多聞院

平坊土師の境内にあり... 照檀

大師堂

平坊土師の境内にあり... 照檀

平等院

平坊土師の境内にあり... 照檀

穀屋坊

平坊土師の境内にあり... 照檀

大師堂

平坊土師の境内にあり... 照檀

宗性院... 本坊土師の境内にあり... 照檀

普門院... 大師堂... 松樹院... 大師堂... 多聞院... 大師堂... 平等院... 穀屋坊... 大師堂... 本坊護国院... 海龍院... 宝藏院... 大師堂... 普門院... 大師堂... 宗性院

龍燈の巻 千手台の中  
 夫當山の唐の代宗のころありては徳世なるて國を以て  
 ち新寺ありて先上人の因縁ありてや上人のたに在り  
 ちて海濱の唐のころありては法東漸の撰の文に  
 先仁天皇の佛宇寶龜元年海に航してか印海を普く  
 靈地とてありて大巨刹を營ててありて先上人の遺跡あり  
 ち跡とてありて未世の凡俗に梅や先上人としてあり  
 國を徑ててありて此の州にありてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありて

千手台 龍燈の巻

夫當山の唐の代宗のころありては徳世なるて國を以て  
 ち新寺ありて先上人の因縁ありてや上人のたに在り  
 ちて海濱の唐のころありては法東漸の撰の文に  
 先仁天皇の佛宇寶龜元年海に航してか印海を普く  
 靈地とてありて大巨刹を營ててありて先上人の遺跡あり  
 ち跡とてありて未世の凡俗に梅や先上人としてあり  
 國を徑ててありて此の州にありてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありて

海西南に漲く、龍燈の巻とて示り朝より潮高き長夜の迷  
 夢とてありて一たびありて嵐浪世の豐をとてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 其夜よりありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 上におまりのありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 のありてありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 ちありてありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
 思ひありてありてありてありてありてありてありてありてありてありて



其の川に舟を浮かべて  
 舟のなかで酒を飲むも  
 舟のなかで歌をうたふも  
 舟のなかで舞をまわすも  
 舟のなかで食事をすませ  
 舟のなかで寝るも  
 舟のなかで死なすも  
 舟のなかで生かすも  
 舟のなかで遊ぶも  
 舟のなかで働くも  
 舟のなかで愛するも  
 舟のなかで恨むも  
 舟のなかで笑うも  
 舟のなかで泣くも  
 舟のなかで生きるも  
 舟のなかで死ぬも  
 舟のなかで……



馬場若浦  
 馬場の若浦



仏  
 鐘  
 人  
 みる  
 人

用倉と許さんつゝ威徳瓜けけのどまあり〜乃自  
 十面〜る像を二カニ残れ彫刻〜る瓜〜る草〜る枝  
 霊像の固く秘〜る開〜るを〜る〜る人〜る志〜る  
 上人のよろ 観音の如くたる心と契符合の時〜る  
 といふ草〜る〜る草の靈跡見〜る新〜る上人の法眼〜る  
 多ん〜る〜る四方の備素蟻の〜る集〜る磨の〜る〜る  
 濁作のあり〜る〜る〜る嬰兒の慈母と〜る〜る〜る  
 浄土の相〜る變〜る〜る〜る上人向來の法奥陸〜る  
 ため思ひ天下養宗萬民快樂の〜る手身〜る大般若經六  
 百軸と〜る〜る〜る中〜るを〜る〜る  
 計女倏忽〜る〜る上人の得龍は〜る〜る白〜る〜る上人此〜る〜る  
 己あ〜る〜る後佛法世は〜る〜る海をの魚鼈亀も常〜る〜る

の世にききし海にありては、将にすべし上天の果をばはら  
しむるの功徳なきをききしに、報恩のこめ例、嘉七月九日  
後、たに世に上る浄燈、成に、上人のち、徳を世に羅  
まらば、  
その功徳なきをききしに、海にありては、  
海上なるたに、  
の群衆、  
撰と、  
國に、  
流度と、  
仁道、  
女は、  
不僧、  
あつ、

新宮よりたきまらるるより、を衆人、  
と、  
人、  
海上、  
衆人、  
維、  
引、  
蓋、  
日、  
了、  
た、

竜泉ありゆりゆり八徳と具足して寒暑に増減ありて  
ありてなきを二蜜灌頂の園伽とありて是より二今の曉と  
期せんといふ是より二子く号ゆえん江ははるはるありて  
紀の事とありて二穴のつらとありて  
ハ社昔神代ノ皇子トシテ海國ノミナトニシテハ  
井ノミナトニシテテラウ郡城寺建立アリテ灌頂ノ園伽ノミナトニシテハ  
勝景ニシテ名アリテハ名岬山ノミナトニシテハ  
對し多分の樓閣翠微とわきまんと丹芳は園に俯る庭と  
ちをり強人の帆衣雲樹に映糸とて天の口の霞を愈ると疑  
漁夫が孤棹煙波ふ出度とて九湖の月あはらうるに似たり  
了といふとて人誰か世々の標とてとてとらんや

遊紀三井山

祇 南海

天下二千三福地。此山亦是古靈場。湧きわたり蓮

洋閣林樹起痾花雨秀。昌圓一燈傳。石玉燄翠屏。二

井讓清涼威神魏々金剛窟。幸暉光明秘密藏。

神代ノ路山在昌國縣海中其八景中有洛伽燈火蓮洋古度天台翠屏山  
有二三井山有藥樹傳是自龍宮來往歲本堂啓金龍給衆縁

同

上野義則

朝試謝公展給園日未斜秋風吹佛合龍晴霽遠漢家  
窗外芭蕉樹帆前芦荻花山僧偏愛客海色上袈裟

雨中帆舟望紀三井寺

然野老人

駐棹自從容。依沙起佐獲。霧晴悲閣出。雨歛在家

重渴酌杯中物。屢餐聞飯後。鐘徒看。三井地。泥路怨難蹤。

紹述先生文集云。山上有寺曰紀三井。辰山面海。磴道五層。歷二百餘級。峻如辟立  
上有堂塔僧坊。此向接和歌濱。海之地多有雨田堆沙。作堤。礫石者。蓋及暮和微雨而歸矣

りんあく山のさうくまうくくは三井山 くッッ  
かあやーく山の仲の帆を白く  
とそや仲のーく山のまかりと帆 去 来





浦のちよき紀三井ちよりきくれたり

松後 尺 童

景れくろくねくや紀三井てら

西後出合 由良 雄

宗祇坂

坂の素た  
れあり

紀三井山下をたにやまの古木の古きわのりたを

宗祇にもくろくや

と 尺 瓜

名州山

紀三井山のあまのり  
霊あり

万葉 名州山車西在來吾意千重一重名草月名園

無 名

瓜雅 名州山車西在來吾意千重一重名草月名園

紀 俊文

夫本 名州山のちのちま立別もや名州のやん

前大納言

日 名州山のちのちま立別もや名州のやん

長覺法師

名州の顔ありとも

三 保

名州の濱

布引村より毛のりまをきり入ぬけまを

名州の濱 名州の濱ありとも

よみま

法極 紀國の名その後と君をいふものなりとて國つる よみし

新古あぬ 鬢のつらみちをばすまはるる名その後とてはつひに 俊 成

玉葉 かほつらみちの流千をばすまはるる名その後とてはつひに 式子内親王

優千 浦はしるも名その流千をばすまはるる名その後とてはつひに 内大臣

新千 あつらみちの流千をばすまはるる名その後とてはつひに 右衛門督教定

夫木 芭蕉の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 正

日 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 兼 甫

千五百 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 定 家

文木 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 有 家

日 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 雅 經

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

家集

しるもあつらみちの流千をばすまはるる名その後とてはつひに 法輔の臣

家集の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 河法師

雪玉 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 原光經

竹根 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 内大臣大伴

千首 紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 正 殿

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに 耕 雲

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

紀の國の流千をばすまはるる名その後とてはつひに よみし

名草の浦

布曳の衣

羅山詩集日

紀列三井寺中置大慈像。世傳昔有僧常信觀音住此處。一旦

順德院中製



西凡今見生南修  
 荆坡含玉露  
 僧 義堂



其角  
 西凡今見生南修  
 雙の  
 東武 陸羽  
 西凡烟  
 本老  
 本刊西凡烟





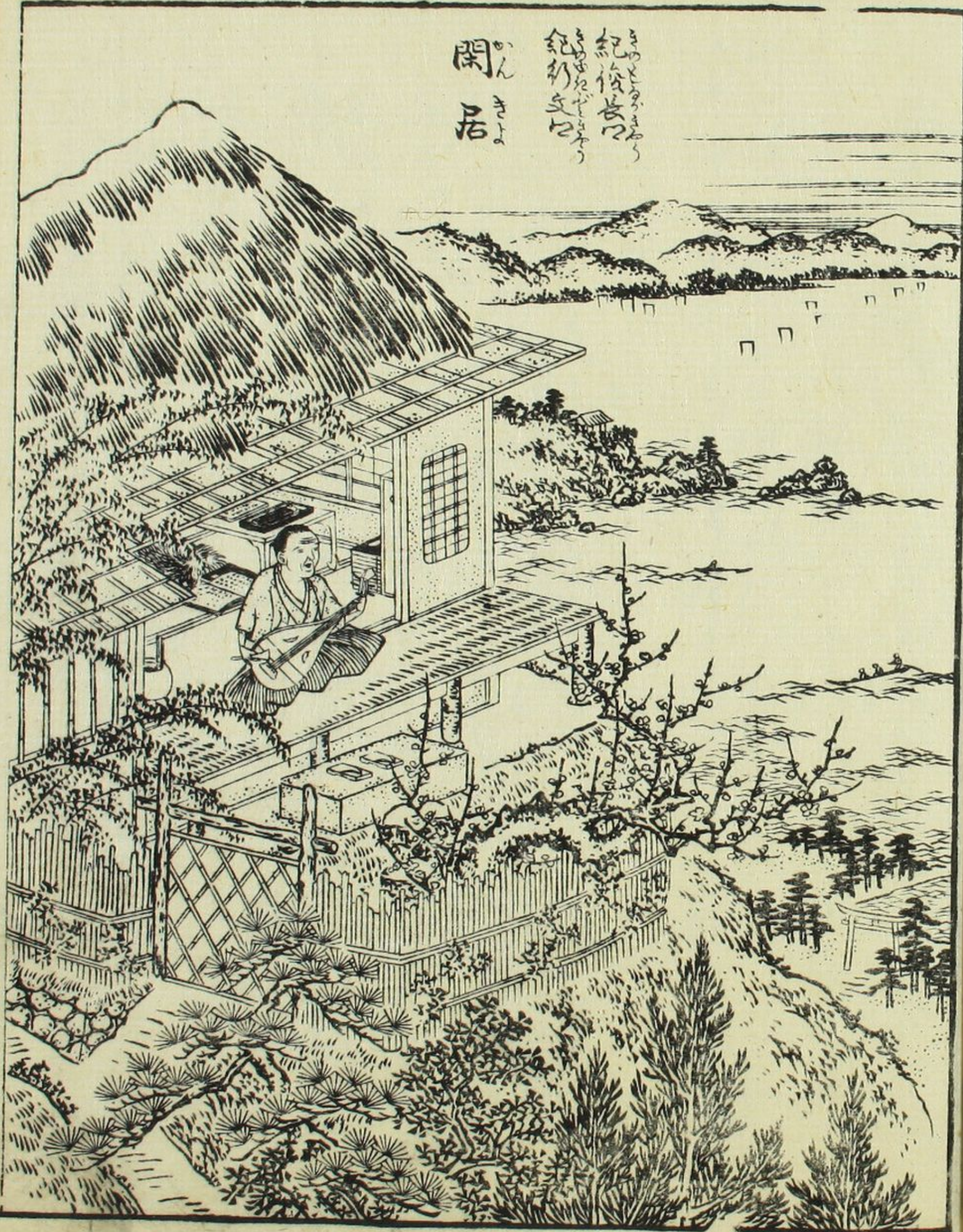
琴浦秋鴻  
 八月九月蘆  
 花舞三點五  
 點屬下淺疎  
 兩夕陽秋影  
 澹相映相呼  
 不迷處好將  
 山水誠商量  
 無意水田逐  
 稻深飛來故  
 宿琴浦月碧  
 水明沙夢瀟  
 湘  
 抵南海

名州濱  
 名州宮  
 名州浦  
 名州渡  
 可也

いさろく國造の行務よりちりぬまこ一殿の舟をひる日前  
國懸の舟をもちて神武天皇在征しあつたれあつて二種  
の神靈もたぬらつて神靈代の神鏡日前宮のり神傳神傳を神靈代  
の目録神傳よりまづりて共々天皇を神の前神靈にまづ  
またを天送根命を今日にまづりてあたまうたれぬ天送  
根命二種の神靈と奉じて初め國かを浦より本の本と後  
く終浦ちる岩が根にこけ舟をうつたあつたり是則日前國懸  
り而大神ちり甲岬より海中へ三丁ありもあつる岩ちり舟をうつり  
其後豊御入姫命沖美と奉じてこれよりあつたれあつて  
此地をけつたあつたり天懸を神の吉慶の名方の瀆文あつり  
あつて一が兩を神のちり此地もあつたりまづりて終無仁天  
皇十六年秋月村の今の皇代の宮を造り修りたまふまゝ其  
りし社殿もいふ處をたれまづりて天送のまゝ島

右ふらんぬ終もたれりけりあつたり大神林のともあつたり  
あつたれの本立のえとまづりて物の處のちりまて林ちり  
あつたりゆつちるあつたり宮居の祭のちりまて林ちり  
のまづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて  
狂歌  
わろはまづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて  
行凡  
神満山善福寺日村あり本尊阿弥陀佛西國二十三日  
現考西國二十三日  
當寺の開き久遠に詳ちりて大永天文年間古  
宝物記録未天のぬみ灰堀なり  
市鎮座寫日平の  
市崎觀音堂日平の  
紀行文退隱舊趾宮山の頂上  
仍まづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて  
仍まづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて  
仍まづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて  
仍まづりてまづりてまづりてまづりてまづりてまづりて

あり 國造の御下り 國造家代々其人より一かたよりなり  
 中後長の博學なり 其の著書は 後小室帝詔して 其の  
 を召し入る 其の撰りたるもの百餘あり 牧野君と 思入りて 市宮  
 侍に 宮用りし 其の位は 叙りし 其の位も 俊長榮利と 心  
 せられ 毎々 其の道のおもひ 終り 應永十二年 初志は 遂に  
 退隱し 其の著書は 梅敷百株竹千葉と 名く 其の行は  
 標し 書軸萬巻を 後々 其の 讀む 酒徒琴侶 引く  
 其の 著書は 優游し 其の 著書は 終り 終り 其の 著書は  
 著しく 新後拾遺新續古今集の 集り 其の 著書は 其の 著書は  
 の 著書は 終り 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は  
 て 位は 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は  
 帝に 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は  
 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は 其の 著書は



閑居  
 紀後長の  
 閑居

ちをりはりともむむ文のこより貴寵とらうやなほゆく  
 けあふと追つて世榮と輝一此地の両岸を耳たて情を煖  
 霞の放まふ一ゆとく詞花のちやまたはらう尚付朝庭乃  
 人々のこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 中にも東沼御師が贈序ふ曰梅香竹園如於琴浦暮煙上  
 而中に右讀書絃誦聲者定其公之廬乎予茅鞋竹杖遊  
 次回さるるこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 詠致多し新續古今に採摭せり  
以上本邦の歌集に採りて  
杖藜 隠逸 修より  
 若浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
同  
 琴の浦  
此浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
同  
 此浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 自然とてそのまありようこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう

琴の浦

後拾遺

新勅

ちをりはりともむむ文のこより貴寵とらうやなほゆく  
 けあふと追つて世榮と輝一此地の両岸を耳たて情を煖  
 霞の放まふ一ゆとく詞花のちやまたはらう尚付朝庭乃  
 人々のこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 中にも東沼御師が贈序ふ曰梅香竹園如於琴浦暮煙上  
 而中に右讀書絃誦聲者定其公之廬乎予茅鞋竹杖遊  
 次回さるるこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 詠致多し新續古今に採摭せり  
以上本邦の歌集に採りて  
杖藜 隠逸 修より  
 若浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
同  
 琴の浦  
此浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
同  
 此浦のまふはけをりたおんこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう  
 自然とてそのまありようこもまは情を吟詠のつと是が情をよせざるあう

道命法師  
 法印幸清  
 侍拱隆教  
 衣笠内大臣  
 よみ人  
 前大納言為良  
 正二位隆教  
 前大納言經經  
 仲 正  
 飛鳥井雅永  
 家 隆  
 文貞 公



琴浦松緑

俗所謂布挽松昔有神僧自龍宮獲鐘處其繫組松是也

祇 南海

繫組千古緑參雲浦得松風琴自開波底華

鯨何處吼魚人試問洞庭君

考く妙や浪も岩も只のり

槐亭老人

明見社

内原村西二所り山の麓あり一村の生土神也

春日神社

日狐持待の南の岳にあり土人の信を承

船尾

中より三平判間のか布職補任際目の古記ありか船尾の地土のこころを承

補任

船尾卿乃亦職事

右以藤原為宗令補彼職之上者守沖下

沖之事亦世相違ふ令勤仕々状如件

建武五年七月十四日

預所判

天照大神

名草彦神

四座

神樂舎

二十六夜に後を祀

春日明神

名草姫神

神樂舎

三夜に後を祀

菟嶋

推現鼻

内宿

菟嶋中名草彦神の御宇に菟嶋の地土のこころを承

中言神社

生土神也

紀神名草比古名草比女神

末社

拜殿

神樂舎

先主御宇

黒江神堂

西本願寺流

本尊河弥陀佛

通神堂の山四年本願寺神相承第九世実如上人通国法

任歴あをらけりたはりの神坊に遷りて神建立の靈

場をり正後第十世證如上人天文元年六月洛東山科松林

の神堂退去あけりて石山の神堂(法下向まうりて其

は天下静澄をうさるるにうり浪華にあつていりて其

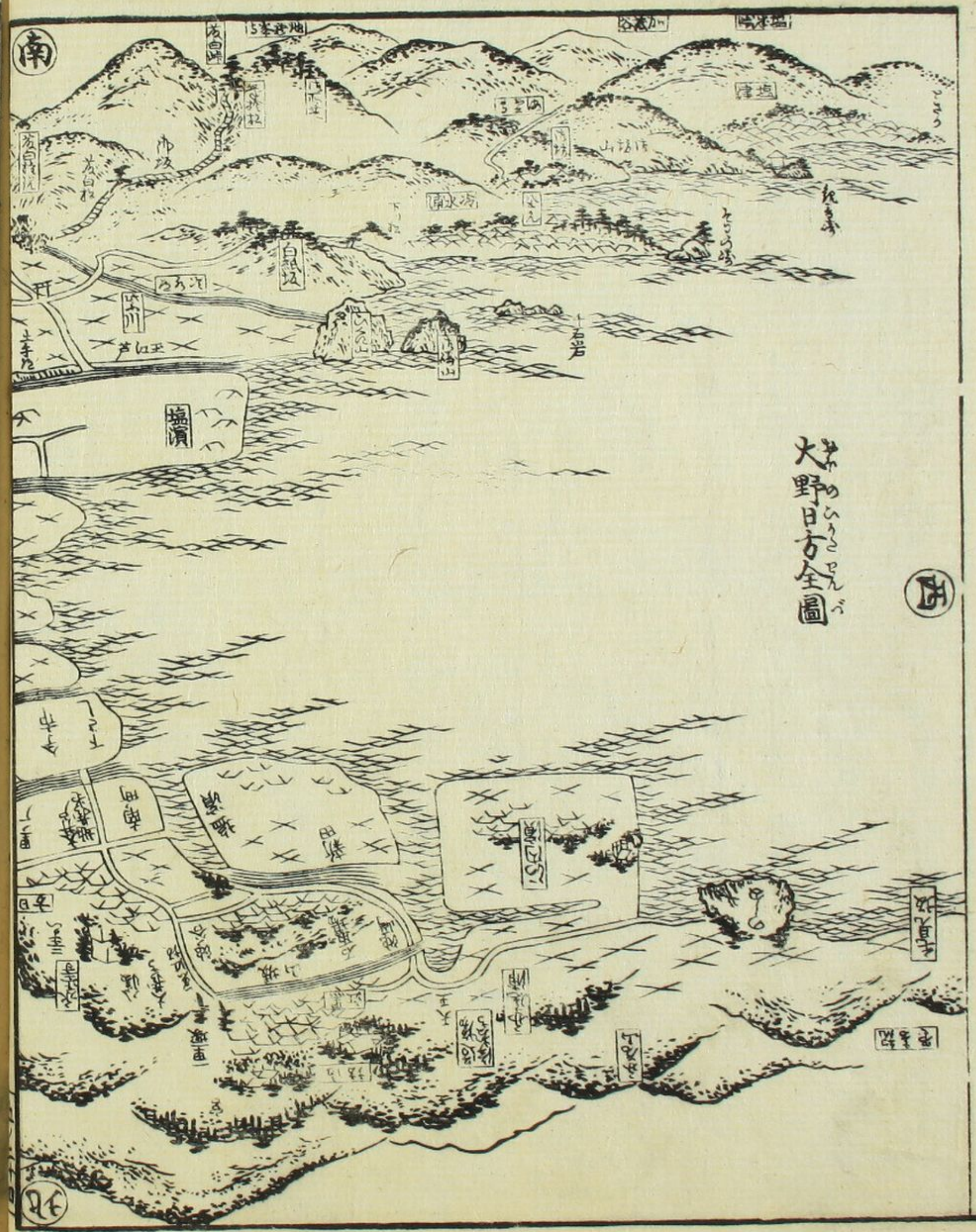
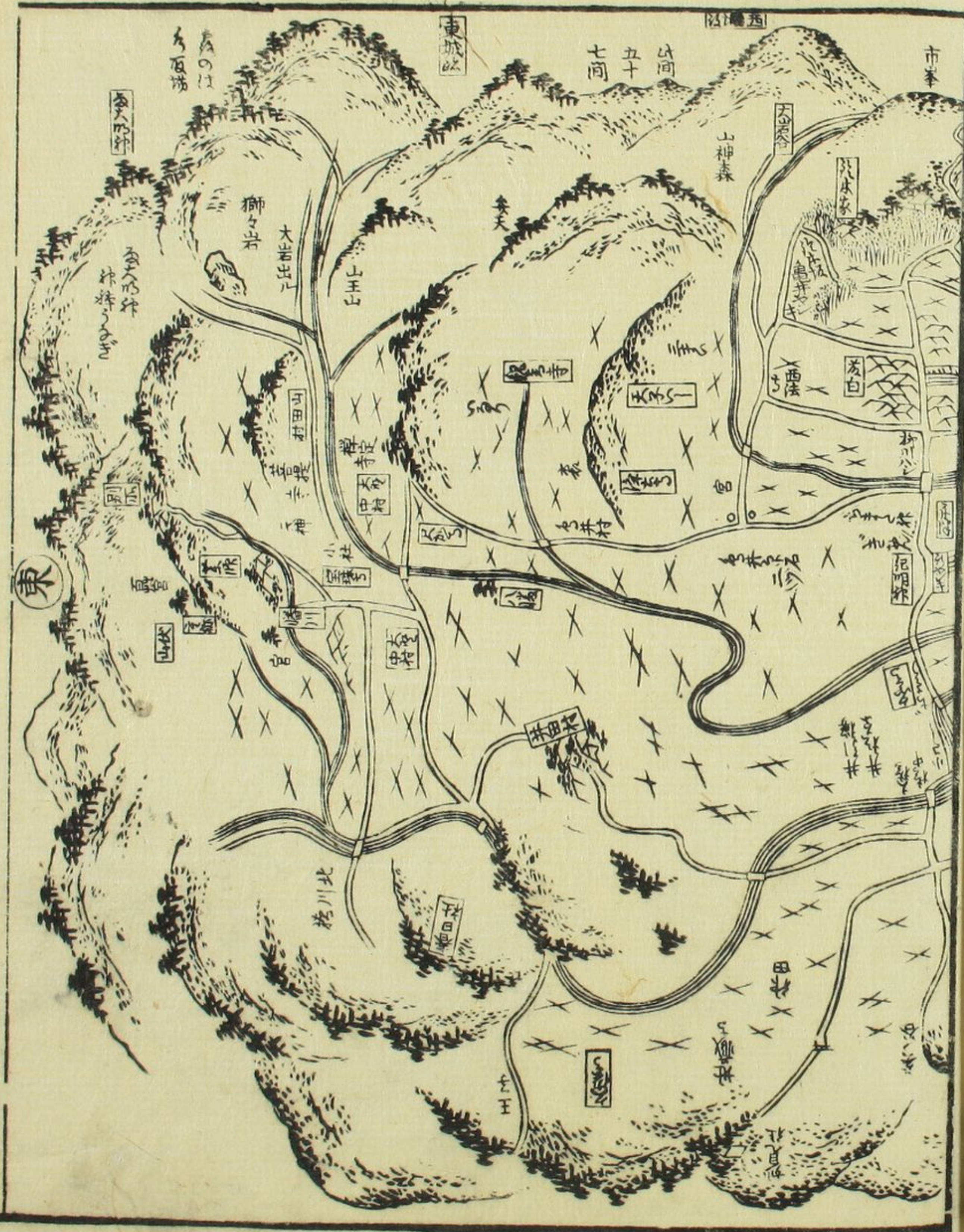
とく通神堂小塾居るる八月十九年お方法勒寺山(後

さるる一丈の年間運水上人法山浦にわりて真法山の安

ん乃趣意をうさるるにうり末世無名の衆生易行直入の法

門はくはらばりてうりてあつていりてゆきまゆ所あま

の門は他力奉起るるにうり法性常樂のおはれを尊信し

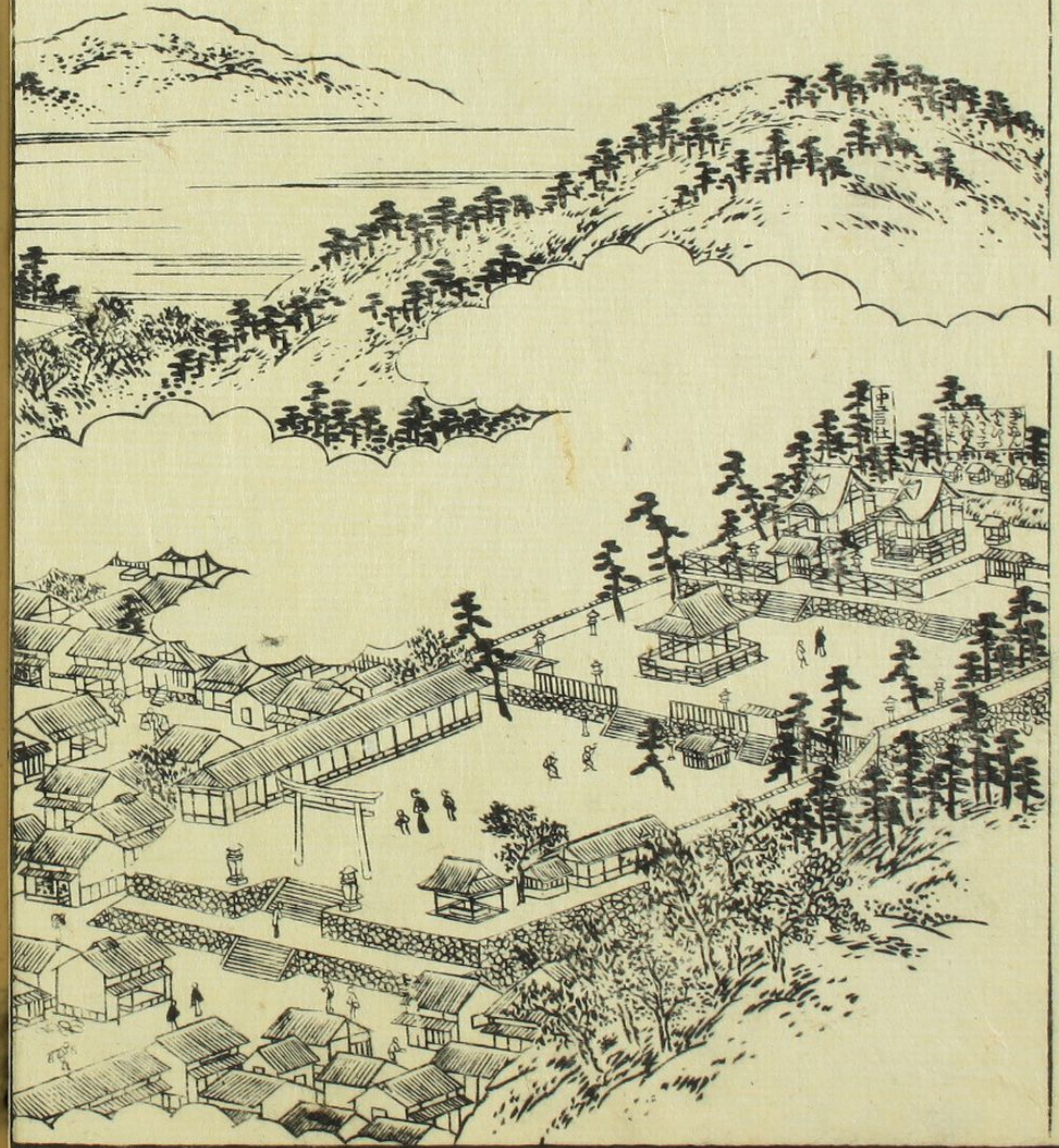


大野日方全圖





黒牛  
中言社  
黒江御坊







観音堂

古宮 幡宮

辨天山定震院永正寺

他の谷

用山半

鎮守弁賊天社

六字名跡碑

奉子阿弥陀佛

阿弥陀佛

本山

大師堂

観音堂

鎮守弁賊天社

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

阿弥陀佛

Handwritten notes and descriptions in cursive Japanese, providing details about the various temples and their locations. The text is dense and covers most of the page.

沖門町

妙見宮里神社

天香山阿弥陀寺

服士波加不動明王

大師堂

阿弥陀佛

阿弥陀佛

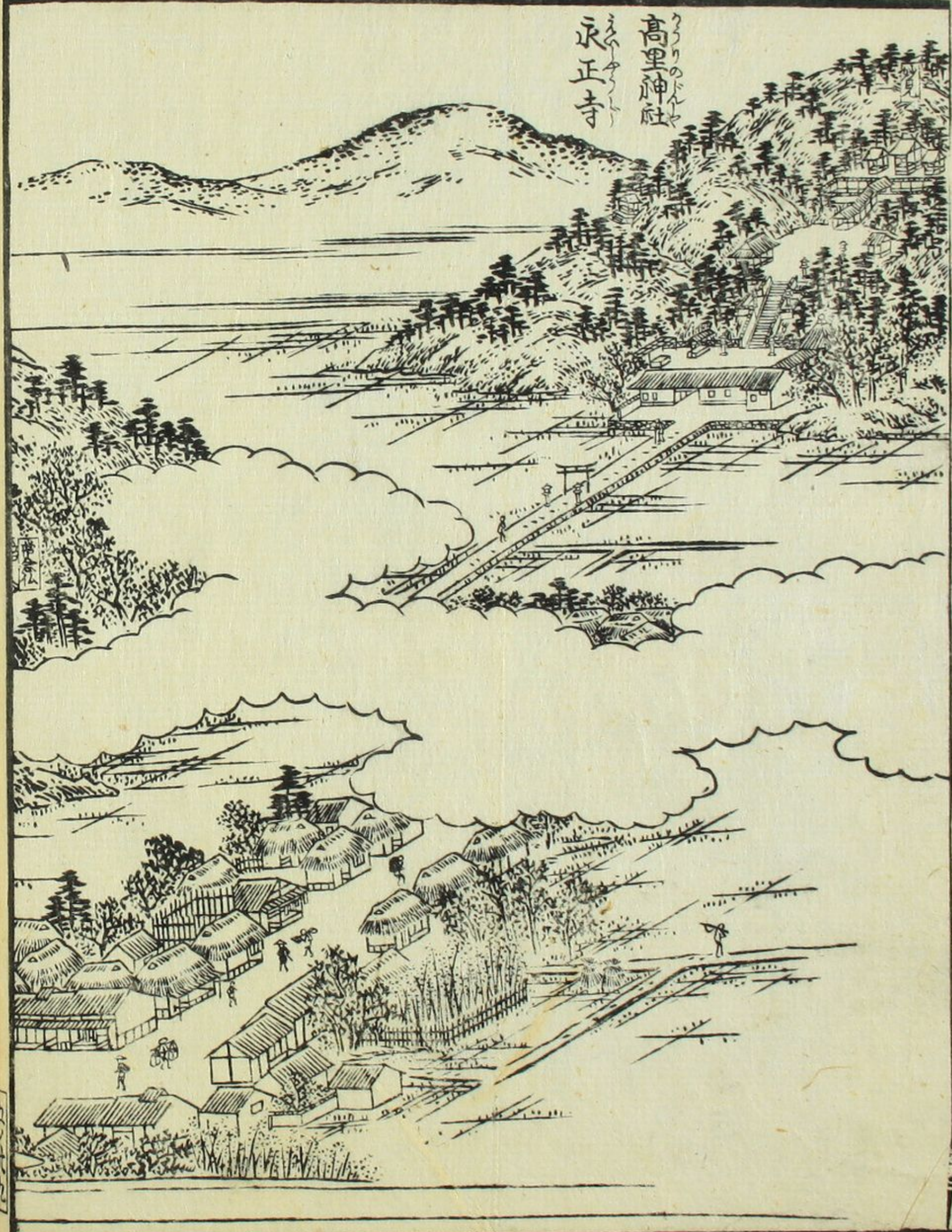
阿弥陀佛

阿弥陀佛

Handwritten notes and descriptions in cursive Japanese, providing details about the various temples and their locations. The text is dense and covers most of the page.



水頭古精舎春至  
 烟華濃松際僧歸  
 晚鼓出谷鐘  
 中創



高里神社  
 高里の山  
 正寺

河村 今津田村より 城趾 河村の山の山上にあり此山生

栗田神社 井田村にあり村の 祀神 栗田朝臣祖彦國草命

あはれと春自下の社より姫大明神より音提房王

子とさうはぬらうちうとせ

春日山徳道院 河村の山にあり古義 本寺地蔵尊

大師堂 徳道院の傍にあり春日の山にあり

大野坂 日村よりあり且来より大野の山にあり

松代王子 春日山の西のふりてあり碑石あり中幸池に云

三上 女権子と云ふ又文明日記に云ふ松代王子次

此の山にあり松代王子次と云ふ松代王子次

凡そ斜さうげと云ふ春日の日の傾くをさうげ

みづと南の海と云ふ日隈をみづと南の海と云ふ

浪きく南の海と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

春日神社 三上の山にあり大野の山にあり

本地堂本尊釋迦佛 座像あり 別当山金剛院神宮寺

大師堂 弘法大師の像あり

折當社の勧請の年曆久きなり其監觴と云ふ中

古大野城敗落の火の餘煙あはれに罹りて荒蕪と云ふ

林と云ふ瑞籬と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

法壇をりてと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

春日神社と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

元弘二年の春日塔宮護良親王南都般若寺より

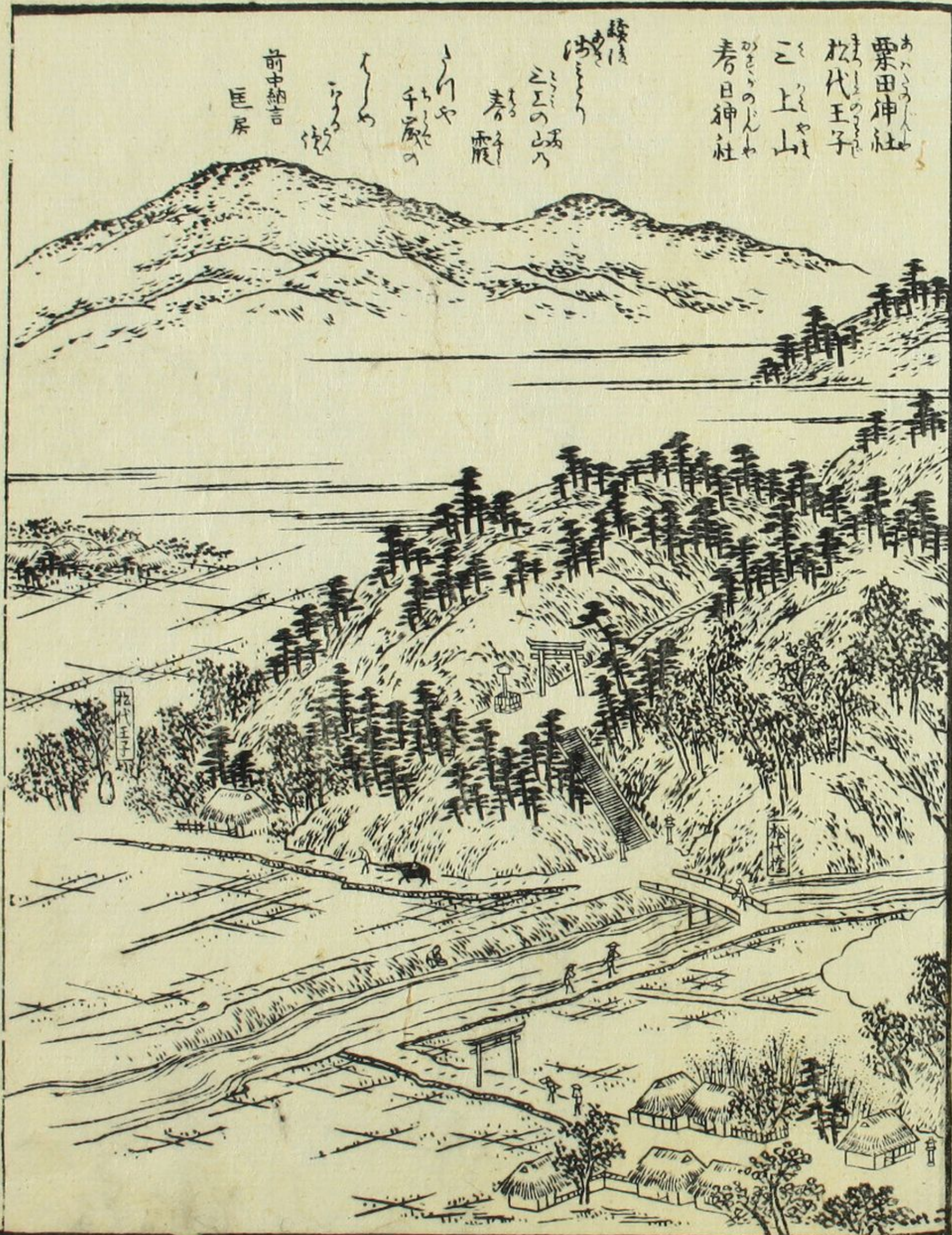
たきまろり其十自の 三上 縮井 田崎 坂本 石倉 尾寺 井口 宇野

元弘二年の春日塔宮護良親王南都般若寺より

たきまろり其十自の 三上 縮井 田崎 坂本 石倉 尾寺 井口 宇野

元弘二年の春日塔宮護良親王南都般若寺より





栗田神社  
 松代王子  
 三上山  
 春日神社  
 前中納言  
 巨尾



栗田社  
 吐竜  
 松代王子  
 春日神社





六月陰崖  
瀑布泉山  
風吹下白於  
綿龍絹織出  
天孫手一尺  
素練不断懸  
峨眉山人

車岩籠

はらりびらりなまへにひらひらとまはるる雲のふりたか  
 沖ありあかき水ありていづれもいづれもいづれもいづれも  
 びへそはらり〜いづれもいづれもいづれもいづれもいづれも  
 此の十波頭乃卿士とまはるるはまはるるはまはるるはまはるる  
 城 此の十波頭乃卿士とまはるるはまはるるはまはるるはまはるる  
 延命寺 百草社 延命寺の屬に 本尊如意輪觀世音  
 大師堂 此の大師堂は延命寺の屬に 本尊如意輪觀世音  
 百州明神 此の百州明神は延命寺の屬に 本尊如意輪觀世音  
 當年二品親王任助再興の棟れ日百州大明神  
 十念山具足院 此の十念山具足院は延命寺の屬に 本尊如意輪觀世音  
 神宮寺 本尊如意輪觀世音  
 作はるる  
 作はるる

大師堂

此堂大師の御像を祀りて、四国十八ヶ所と云ふ、此堂の御像は、天照大神の御像なり。此堂の御像は、天照大神の御像なり。此堂の御像は、天照大神の御像なり。

車岩の瀑布

此瀑布、車岩の瀑布なり。此瀑布、車岩の瀑布なり。此瀑布、車岩の瀑布なり。

飛泉

此泉、飛泉なり。此泉、飛泉なり。此泉、飛泉なり。

百州と分りて涼し

此山、百州と分りて涼し。此山、百州と分りて涼し。此山、百州と分りて涼し。

長笠山

此山、長笠山なり。此山、長笠山なり。此山、長笠山なり。

十二所権現社

此社、十二所権現社なり。此社、十二所権現社なり。此社、十二所権現社なり。

長笠山之麓院願成寺

此寺、長笠山之麓院願成寺なり。此寺、長笠山之麓院願成寺なり。此寺、長笠山之麓院願成寺なり。

千手千眼觀世音菩薩

此像、千手千眼觀世音菩薩なり。此像、千手千眼觀世音菩薩なり。此像、千手千眼觀世音菩薩なり。

然形之所権現社

此社、然形之所権現社なり。此社、然形之所権現社なり。此社、然形之所権現社なり。

鐘樓

此樓、鐘樓なり。此樓、鐘樓なり。此樓、鐘樓なり。

觀音堂

此堂、觀音堂なり。此堂、觀音堂なり。此堂、觀音堂なり。

岡山温泉上人廟

此廟、岡山温泉上人廟なり。此廟、岡山温泉上人廟なり。此廟、岡山温泉上人廟なり。

中納言宗顯御墓

此墓、中納言宗顯御墓なり。此墓、中納言宗顯御墓なり。此墓、中納言宗顯御墓なり。

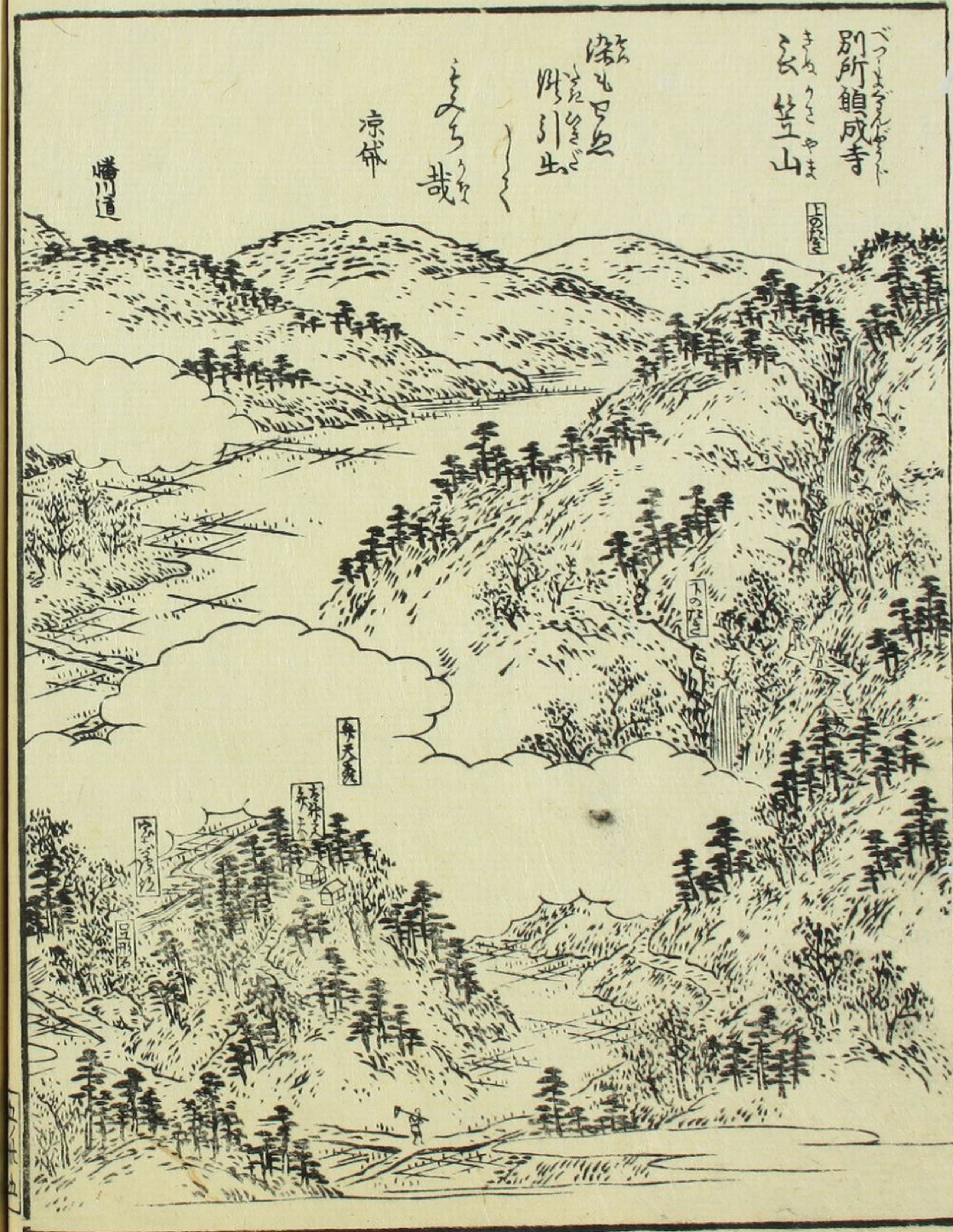
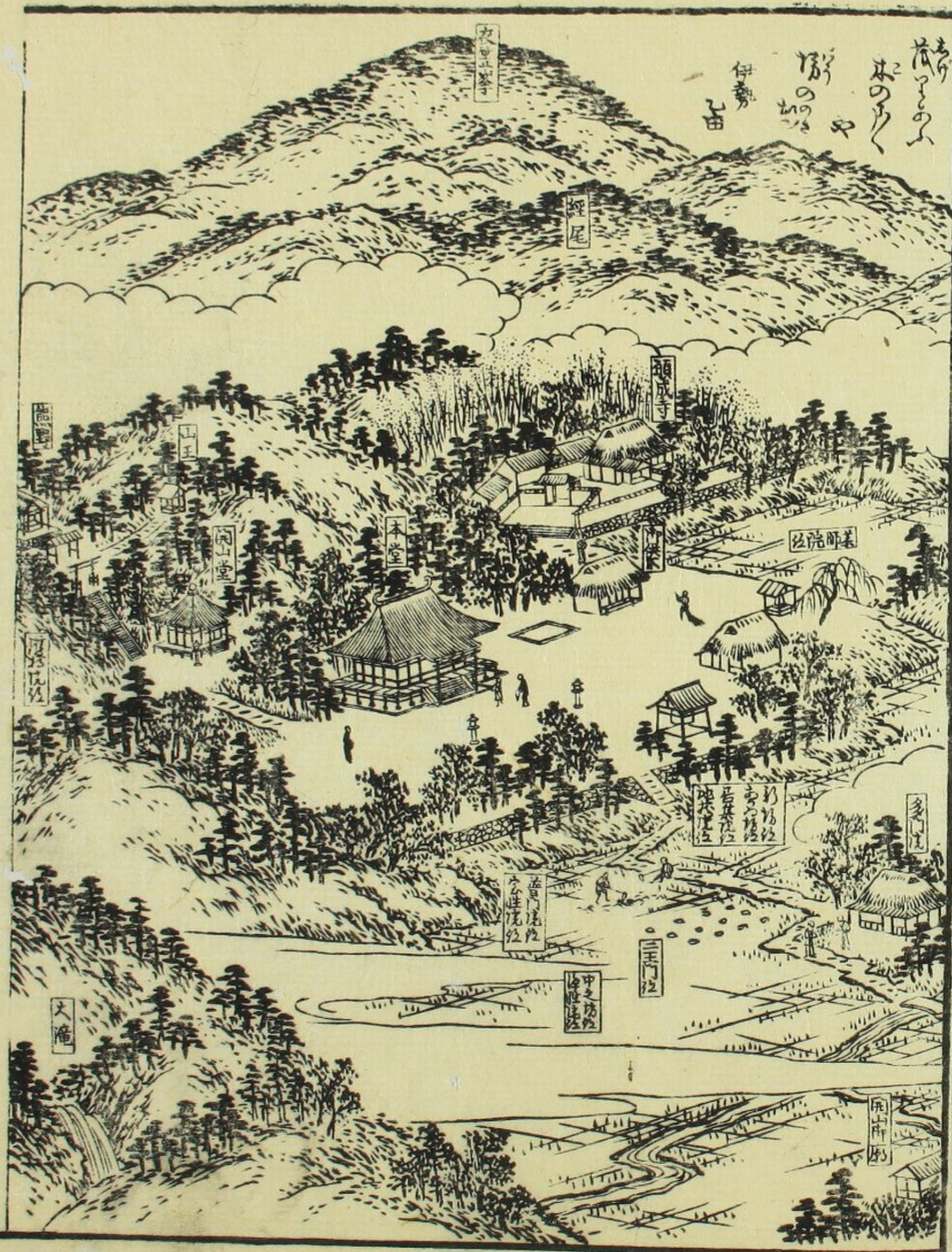
飛泉

此泉、飛泉なり。此泉、飛泉なり。此泉、飛泉なり。

千手のちりや法乃をふとく

依中夫掛 雲 江

此山、千手のちりや法乃をふとく。此山、千手のちりや法乃をふとく。此山、千手のちりや法乃をふとく。



伊勢  
山王  
伊勢山

別所願成寺  
山王  
山王堂  
山王院  
山王寺





幡川村 ありまをことかたし 二つたちた 幡川村のいふはたをこしよりなる村人のいふはたに 幡川村のいふはたをこしよりなる村人のいふはたに 幡川村のいふはたをこしよりなる村人のいふはたに

幡川山禪林寺

幡川村にあり 聖徳太子の御代に 幡川山禪林寺にあり 聖徳太子の御代に 幡川山禪林寺にあり 聖徳太子の御代に

大原堂

大原堂にあり 聖徳太子の御代に 大原堂にあり 聖徳太子の御代に 大原堂にあり 聖徳太子の御代に

眞守河

眞守河にあり 聖徳太子の御代に 眞守河にあり 聖徳太子の御代に 眞守河にあり 聖徳太子の御代に

什寶 聖武皇帝御影

二千佛画像 聖武皇帝御影にあり 二千佛画像にあり 聖武皇帝御影にあり 二千佛画像にあり

夫はあふ人皇四十九代を武天皇の勅願所にして 聖徳太子の御代に 夫はあふ人皇四十九代を武天皇の勅願所にして 聖徳太子の御代に

乃を上人の因巻とて 天平五年春二月を武上皇玉體不 乃を上人の因巻とて 天平五年春二月を武上皇玉體不

豫するをたすべし 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 豫するをたすべし 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

のふに他益市創立あり 藥師佛法あり 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 のふに他益市創立あり 藥師佛法あり

平念一あり 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 平念一あり 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

建あり 法燈熾ふ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 建あり 法燈熾ふ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

良仁の冠より 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 良仁の冠より 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

瑠璃光七佛の法經に 古洋王が来宮月 智者教光者自左王の 瑠璃光七佛の法經に 古洋王が来宮月 智者教光者自左王の

来宮を色にえ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 来宮を色にえ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤 乃の法は息遊戯村通ぬ 乃の博全巻にして 白王城より南方坤

下居神社

下居神社にあり 聖徳太子の御代に 下居神社にあり 聖徳太子の御代に 下居神社にあり 聖徳太子の御代に

雨の宮

雨の宮にあり 聖徳太子の御代に 雨の宮にあり 聖徳太子の御代に 雨の宮にあり 聖徳太子の御代に

苗取堂

苗取堂にあり 聖徳太子の御代に 苗取堂にあり 聖徳太子の御代に 苗取堂にあり 聖徳太子の御代に

宇守山地福寺

宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に 宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に 宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に

宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に 宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に 宇守山地福寺にあり 聖徳太子の御代に



大師堂

弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。立千七百五に記す。法隆寺に在り。...

新王山菩提寺

山田村にあり。本尊釈迦佛。二尺五寸。作。...

大師堂

弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。...

南陽山禅定寺

由良真國寺。本尊十一面觀世音。...

肥後達磨大師

觀音堂。弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。...

法雲山慈眼院新地寺

本尊聖觀世音。...

大師堂

弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。...

宝園山蓮華寺

本尊延命地藏。...

大師堂

弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。...

三八幡神社

本尊。...

大師堂

弘法大師の像化す伴ふに四国八十八所と稱す。...

宇野辺和泉守貞久旧宅跡

...

大野

...

廢新地寺

...

大野城址

西の城。...

城。西の方。山勢峻絶。東西の嶺連。其中に虹岩。...

本朝通記

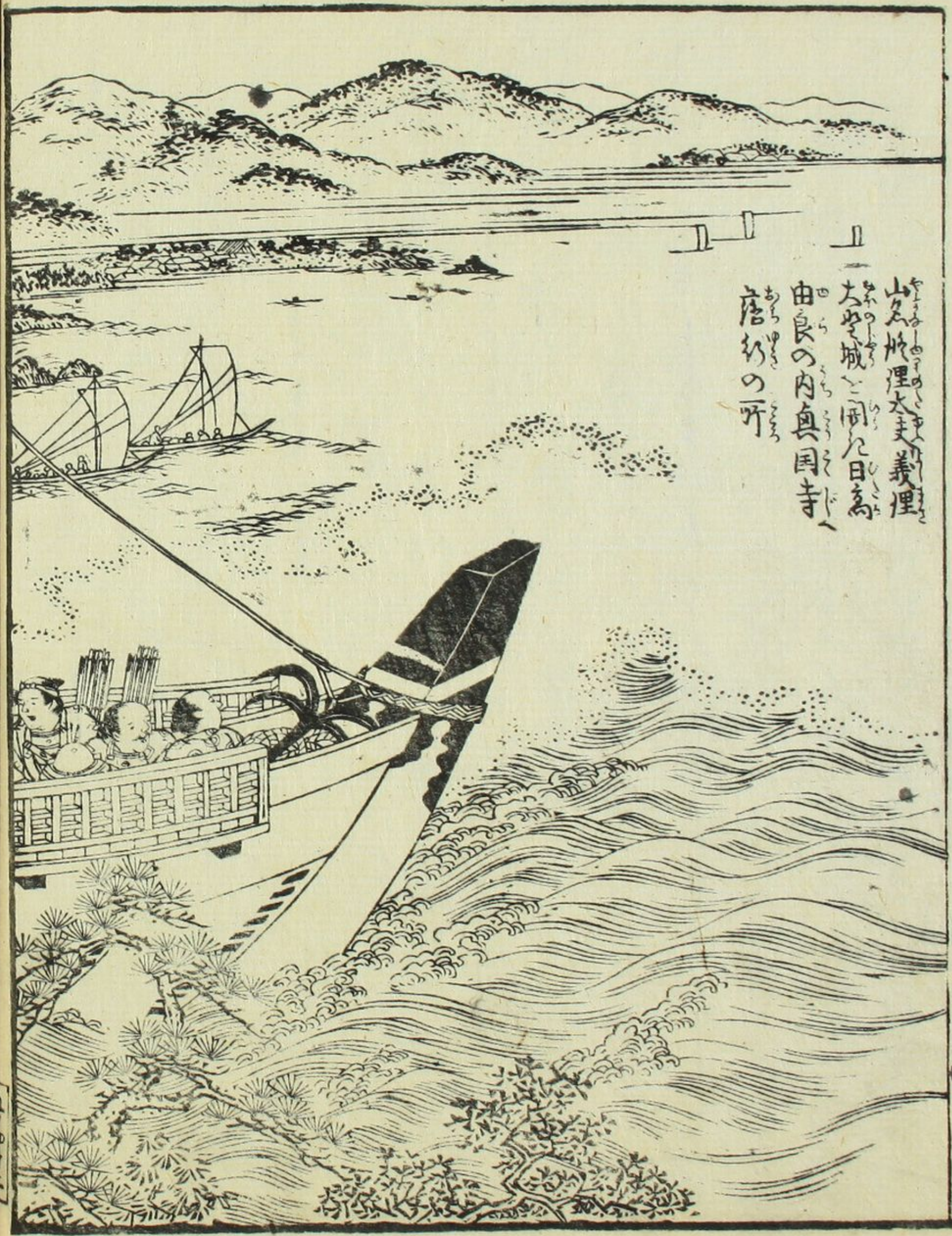
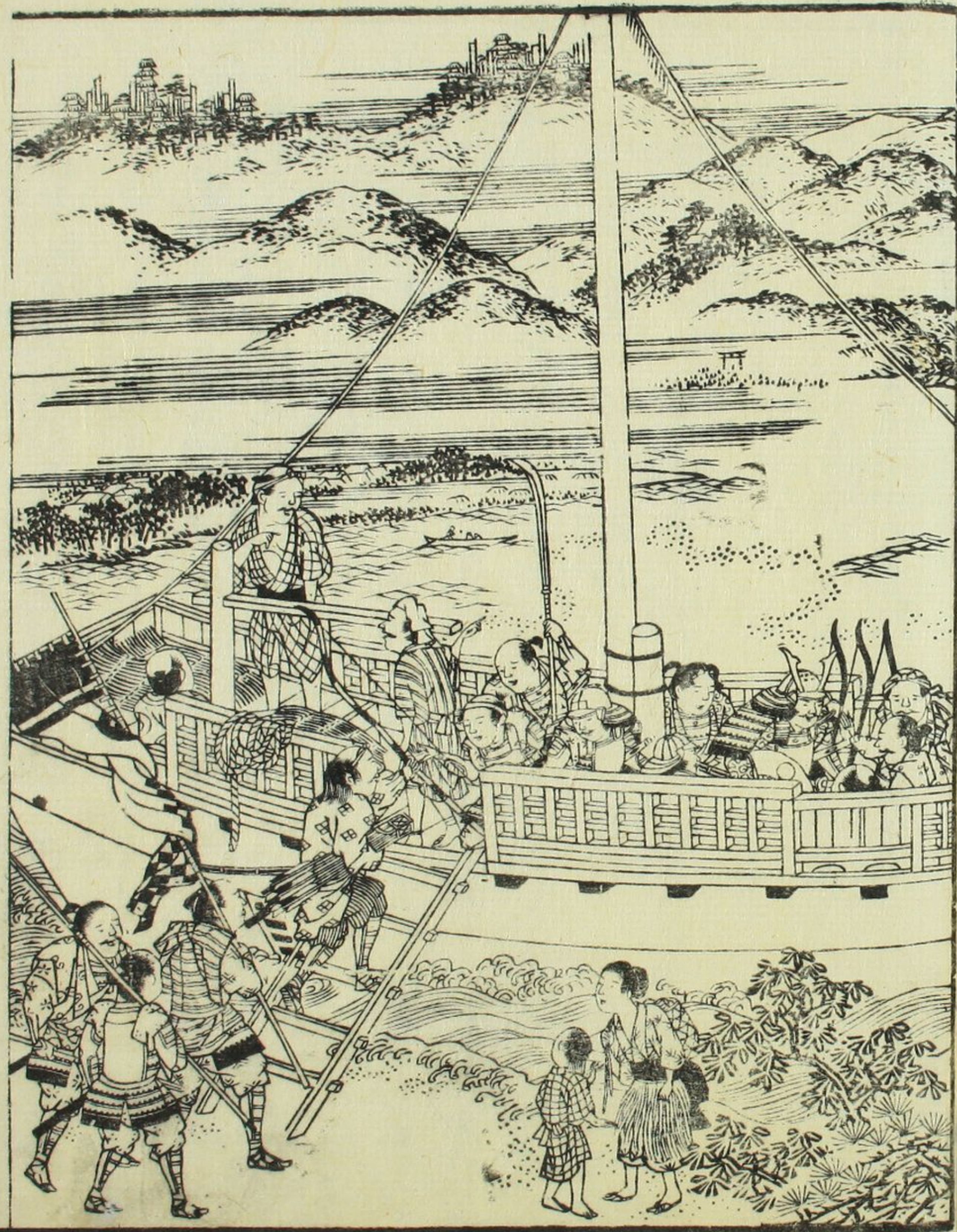
大内左京大夫義弘は下其の城代奉給平井豊後  
<sub>あはれ</sub>こまに守るるまうるふも永六平の秋大内助及逆義弘畠山  
<sub>あはれ</sub>基國が詭言とて泉州堺浦に合戦し基國が陣お  
<sub>あはれ</sub>つり畠山満家と討つこの勲功よりの紀伊国に後人  
<sub>あはれ</sub>のつた由城守守護代に佐々木守入道あり天文年間  
<sub>あはれ</sub>二月筑前守に改まらるるまの比は神保の末遊佐の代守  
<sub>あはれ</sub>おこし瓜守とて大内秀吉の畠山討つたに落城す  
<sub>あはれ</sub>將軍義満叙從二位康暦元年春正月南征使山名義理氏清  
<sub>あはれ</sub>等指紀州之數城菊地下武家西州悉從屬武風天下倍靡將  
<sub>あはれ</sub>握通南朝者治希故紀州之數城無援助資糧置兵か日  
<sub>あはれ</sub>尽義理聞之與氏清等義理合兵赴紀州圍數城河瀬川  
<sub>あはれ</sub>孫六之孫左京進上丸之數塁悉被陷義理棄弊又拔數城南方所殘  
<sub>あはれ</sub>之城僅赤坂十破劔紀州雅川恩新宮之之城而已至是山名大

明徳記

振兵勢南軍悉傾威カ義満以紀州賜義理賞戦功  
<sub>あはれ</sub>を以て中国をなむ今紀伊國に山名修隆を以て義満を  
<sub>あはれ</sub>人おとすねらるるが由に神免の事致ししは二年丙  
<sub>あはれ</sub>沖書のほは来と思案もあつても後する向不義の氏清は比  
<sub>あはれ</sub>とて下ししは神免もあつて後大内左京大夫義弘二  
<sub>あはれ</sub>月十二日都立とて私泉国に池下りて義理退治す  
<sub>あはれ</sub>の兵船百餘艘に八國のほらめりてとて互に紀伊に押つり  
<sub>あはれ</sub>わがゆとて王将の父紀の港より攻入り戦は雌雄を以て  
<sub>あはれ</sub>搦手のふひとて後をりてわがわが私泉の場よりあつて合戦勢  
<sub>あはれ</sub>一千餘騎畠山の府に陣とて山名修隆のあつて大内を  
<sub>あはれ</sub>今草山駿河守に美作勢と拵副とて合戦勢七百餘騎維  
<sub>あはれ</sub>ふの切所とて壘とて雨山土丸に楯籠りて子の敵に待急たりと  
<sub>あはれ</sub>まは今度都の合戦にあつて天下の勲功ありとて氏清後

幸武勇たゞりしはさるりと義理のたぬひらひたるを佐伊國之  
故對の合戦いあんと人をも悪くむらむらみ赤松上統助  
義則はち播磨支國の勢二十餘騎をこすなりとひく美作國  
に及んで國中物をいふるしうの雨に二丸たりのりたるを他勢  
もゆかりして大内氏京を去るは此の案内をこすく白昼に去  
丸とあつて降卒するの門に上統助のかりたる山を分たて  
合戦とすかともありたりは山後河守も去丸はたはるる  
友白とぞえあつたりたるこゝに門を絶伊國はもきく大内氏  
も降卒して義弘の兵降たるりしうの義理の兵目にて減し  
る今も百騎にたゞしうなりありし甲斐もくした事もある  
まうなはれ故の改ちるけぬせんふくむ百姓やせんも思ひ  
おもひたるひらむら二月廿三日の暮は兵軍の肉談しけるん  
修理をまのたむひたるけりとももさるるた要答たりとも

を敵と待ともせんとし心勢ありともち出ては佐山津に馳  
よく敵は伊川をりせんともり馳集り合戦とせむ一木小  
討死ともく名をさるは後たより外のさるるさるる草  
山駿河守りたる仲とすともりはまも是れは谷津  
たるは甲斐もあつ合戦のちうはねんもなごひるの上  
海軍の國人ともく敵ありあり地下人等たりたるまうとも  
仲も幣えんもさる一人ありとも討るる既を取く京都へ  
のちも恩賞の恵とひららんたぬらある若らあるはさるる  
彼の堀構にたはるる人なあるは太死とたはるるりしう  
無事のかへ仲りたるをて追て京都も馳せりたる若くまも  
ふりしがはるる國のかの人ともたさるるりしうさるる  
たるり多るるへけりともり合戦も今つな本とすを達  
せんともさるる夫のたはるるなともり居たたるり



山名 妙理 大妻 義理  
大妻 城 三 岡 八 日 高  
由 良 の 内 真 国 寺  
唐 切 の 所



谷の霞を... 杖の影を... 空の霞を... 日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

久米浦 本海之入る浦 爾浪高き鳥不相子 故爾人 九

紫川 日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

日敷と重なりし海を... 神風や修多羅国へも 出給り下畧

井松原古戦場 日々

詠曰天の五年八月の... 井松原古戦場の... 井松原古戦場の... 井松原古戦場の...

浦見の夷

吉体あが... 浦見の夷... 吉体あが... 浦見の夷...

地藏堂

日浦小川浦... 地藏堂... 日浦小川浦... 地藏堂...

久米川

久米川... 久米川... 久米川...



初まるとはつるふさうもあやさる親王入本道毎月  
友白のまはるまうしいのりあり

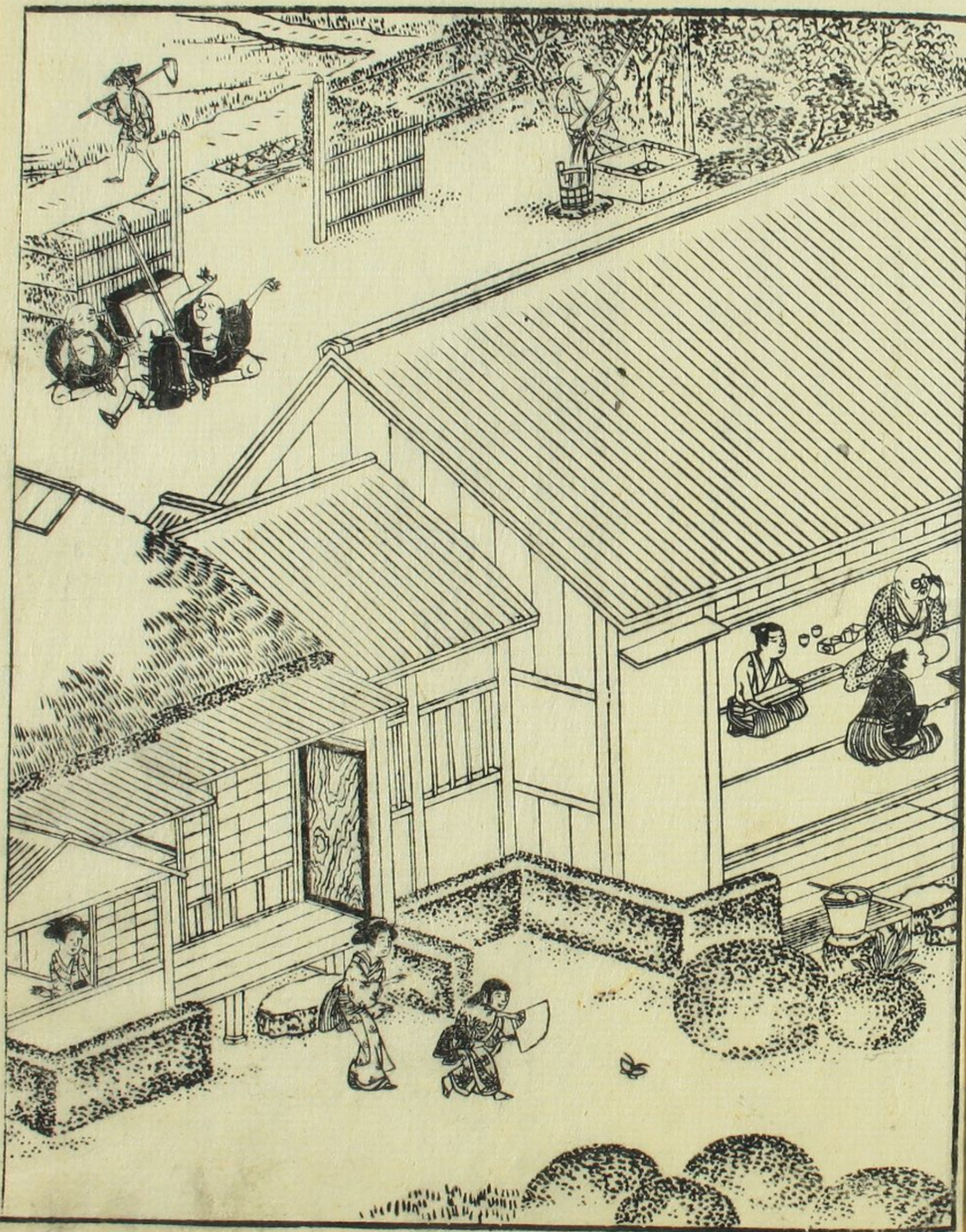
後本之助重家定 細正親の

後本氏之孫姓は後本氏とあり  
左京外別之孫後本氏之孫上戸也神皇正統記卷之五伊勢色雄命之後裔なり姓氏は  
後本氏之孫伊勢色雄命之後裔なり神皇正統記卷之五伊勢色雄命之後裔なり姓氏は  
後本氏之孫伊勢色雄命之後裔なり神皇正統記卷之五伊勢色雄命之後裔なり姓氏は  
後本氏之孫伊勢色雄命之後裔なり神皇正統記卷之五伊勢色雄命之後裔なり姓氏は  
後本氏之孫伊勢色雄命之後裔なり神皇正統記卷之五伊勢色雄命之後裔なり姓氏は

家傳曰曰人皇之初神武天皇東征ちつゝかひ虚室見日本  
国の終りにありまやゝとた饒速日命船徳と後奉て林  
に供したかひいへ天皇の御賞美とありてすみちら  
徳後の姓はとるゝに於て命百杖の御を握取らるる取  
て持持津波と致除たす人とし後本とるゝ名の由て起  
りありと後本氏とありて神代のみりより子孫をて

かゝるくけ地ふ家居しと其後瓜ありとあり  
の比之島重家とつる源豫州とありてとるく所は戦  
をありて終り武州長川の合戦に仁信が忠よりして豫州  
に代つて討たれ 武州長川の合戦に仁信が忠よりして豫州に代つて討たれ  
まゝ忠勇をてそのひなりとる判官とありて其の属とれ  
よりして梁がもる瓜を別當と家曰くありて代  
原家に由縁ありとあり今も亀井之島重清とありて豫州  
にはとるく數軍ありとあり長川に戦ありとあり忠  
はるるゝとありとあり子孫別とあり所ふ家とありて  
本亀井のふと連続とありとありなりとありて代亀井氏  
断滅とありとあり住手とありとありの比  
神皇正統記神代卷の初めかへの一族津波とありて  
に出来たりとありとありとありとありとありとありとあり





此のやうな三郎の宅  
は、もとより、  
江戸の最上流の  
名門の邸であるが、  
その内装は、  
むしろ、  
古帖の味を  
もつてあつて、  
かゝる  
が、  
し

ふまによう

南龍君沖入国のまら回らるる瓜場い今不連綿ら  
其のうへ代への帝王慈登三山沖幸あもまたるる片風筆  
とめらるる神孫の絶ざる瓜賞もたまひ中古より西王護院  
宮おび三宮院沖門主沖合奉あなひはひに沖入集あもた  
まへくまふ希代の名あつてづゝ家藏さるるところを家ま  
清太の書簡義経よりあつる瓜のちかむる感状諸家の  
書簡あつてけ地より人住くま瓜訪く唇飲り又  
好むる一奇すちり

他伊のちのちとありたる比はとるに二島を家のま今  
あつて開ねといふまはなつて入候りしに地押まへ  
ぬらるるまはなつての根まをりてまはなつて地まはな  
まはなつての根まをりてまはなつて地まはな  
及しはやくいしに門は立しとて  
炭くちや 鈴本亀井のちのね 其角  
去 來

維子帝や鈴本が教のりくち人 若山 槐 亭

竹中鮎や丹後鮎より名とぬい慈登育のすねるに 教 二  
あつての林は鮎の鈴本氏やちと并ふ世ある家 若山 眠 洞

亀井六郎田宅趾

相西の山にあつては家階い  
後藤氏にちりて

亀井六郎より鈴本家へ後藤氏より送らるに日

丸印をいへ八巻くま居候はは 君も近日はえは  
右沖孤聖月之奥加へ可有沖下向くち作其許  
移置之作ふおちもはけしひは其園手いせく流と

二月十八日

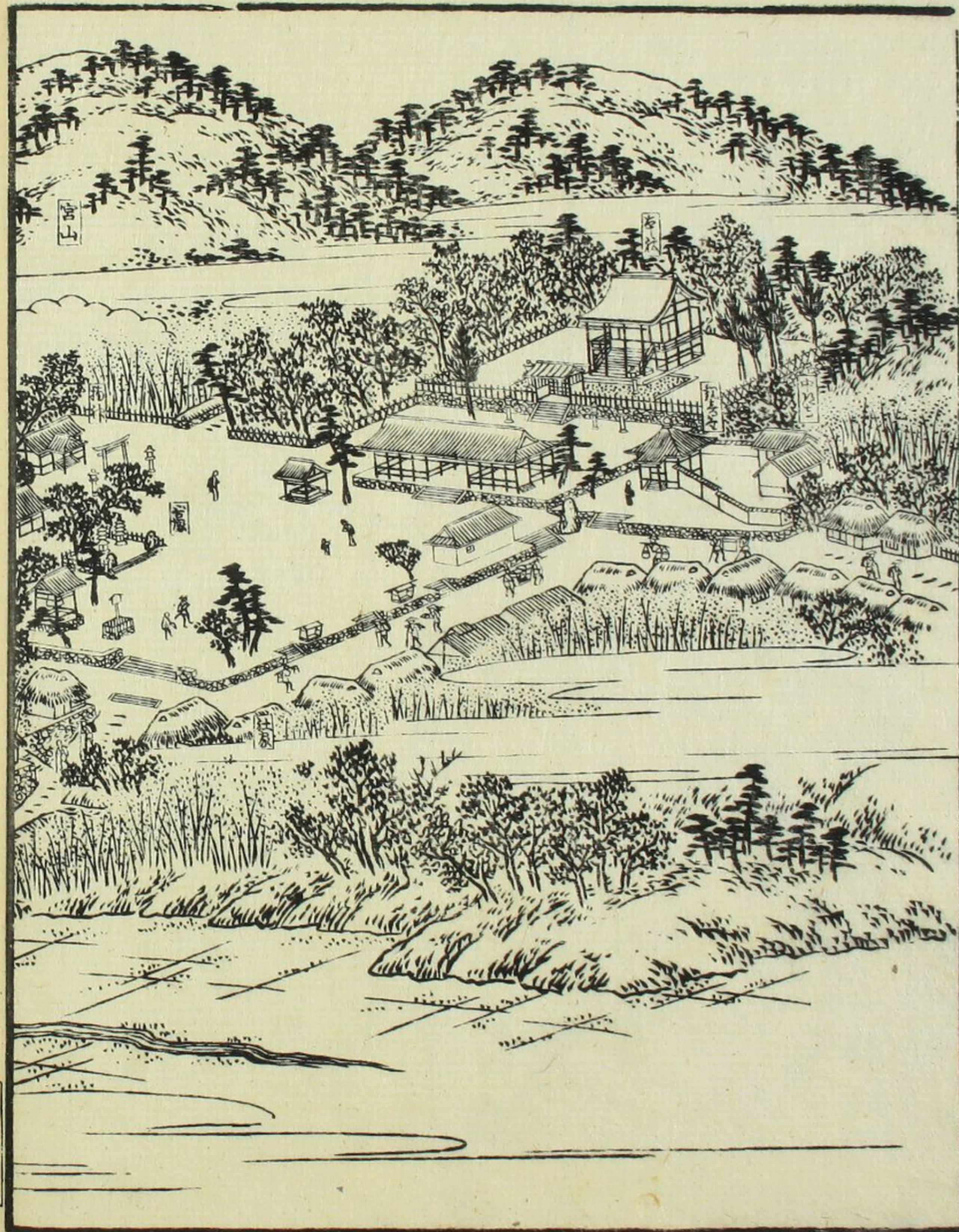
亀井六郎重情

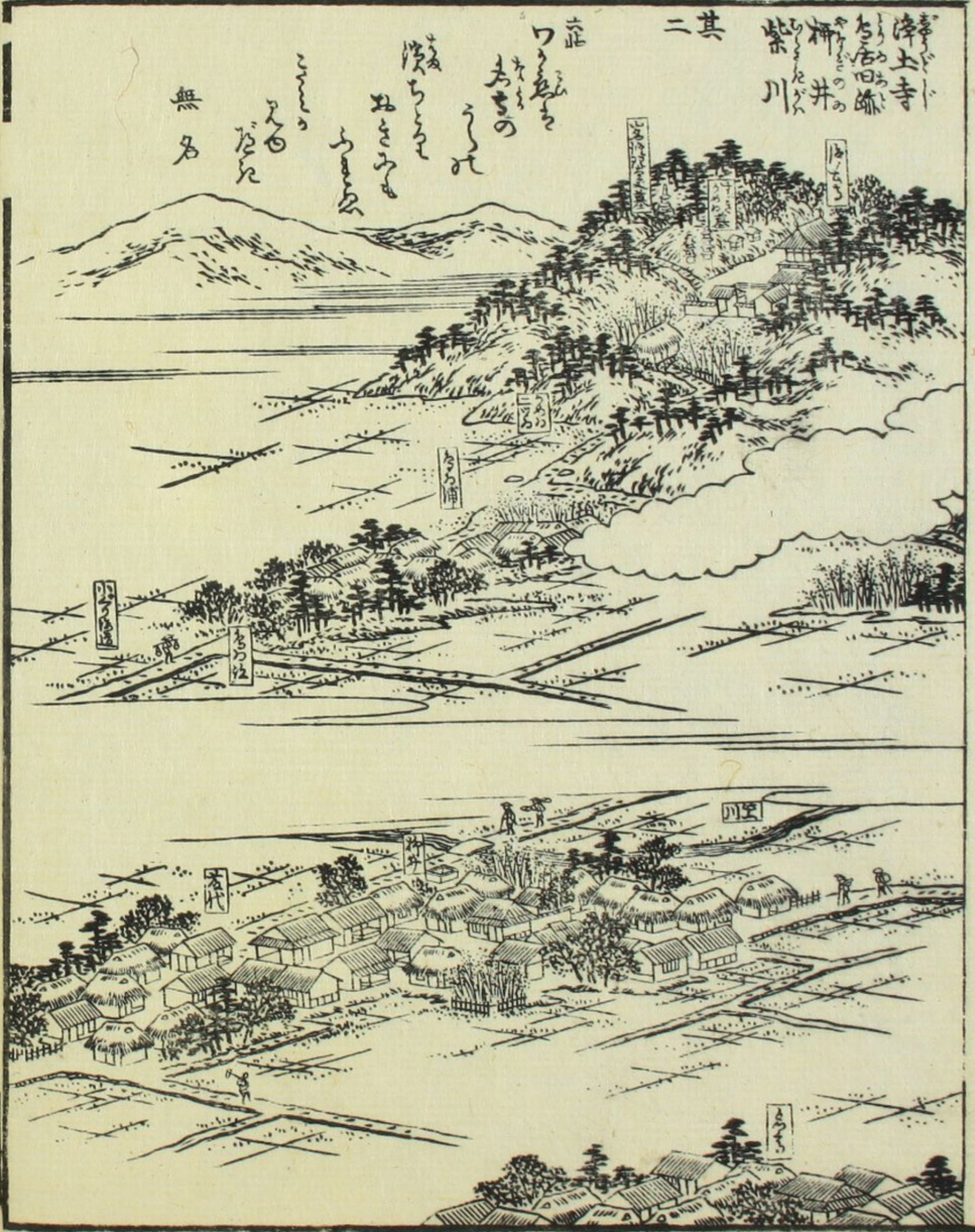
鈴本三郎殿

沖宿所

藤白浦 圓座石

ち居りたるはくち古の代に書しとるに享保年中よ  
園ありていりてのくく庭白く書し  
石の座中にある





中神詠

友白のこゑはけりゆゑふふとさね秋の月

藤白浦の考望

誰う皆あてて汚れたのころる 眠る時 若山 槐亭

藤白若一王子社

月村の南にあり 四月祭禮 二月三日  
九月九日 十月十日

祀神

左 伊弉奈岐尊 伊弉余美尊 火結命  
中 饒速日命  
右 速玉之男命 車解之男命

千早振君 くらもと松のなみのりくちろるる友白の神 安

藝

竇塔之基

楠神社

白雉子繪馬

相生松

五二人相給うて 拱揖 二月廿九日 山手代の美松をりて

総縁九年をる二月廿九日山手代の美松をりて

有るの神々たる代々相承のねまじり即 加さけりお昔

建仁元年十月後鳥羽院御幸記

九日天晴

朝出立頗遅之間已於王子御前有御経供養等

雖宮参白拍子之間雜事人多立隔無路強不往

迄電掣昇藤代坊九條王子有藤代王子和歌會建仁元年十月十日

詠二首 和歌

深山紅葉 海邊の夕日

鳥羽の後の御幸田原にまゝなまじり深劍 御製

浦さくしあはれなる浪とあまの月をたのむて 日

かゝるふたふたのうらみもさやせむらひの 内大臣通親

千代とて月をまなむと慈母の浦の屋の中幸哉 日

ゆめりともひかみかみか折のこゝろをゆく 日

参議左近衛藤原公經

浪らるる松のひなごの御よりまじりその月より 日

あると誰まてくむき山のゆたのりくハ海深も 石岸大貳

み兼月すむ夜はささるはたやなみゆらなり 日

おそろひあはれなる日ぬのうらみりまじりなるを 右中将通光

奥津風の上の廣まじり月あはれなりけあぬ人 日

しるすわが花もほなぬあまの紅葉御幸待たり 左近衛藤原

曇るん後のほの君代の物さかきりあはれなるを 日

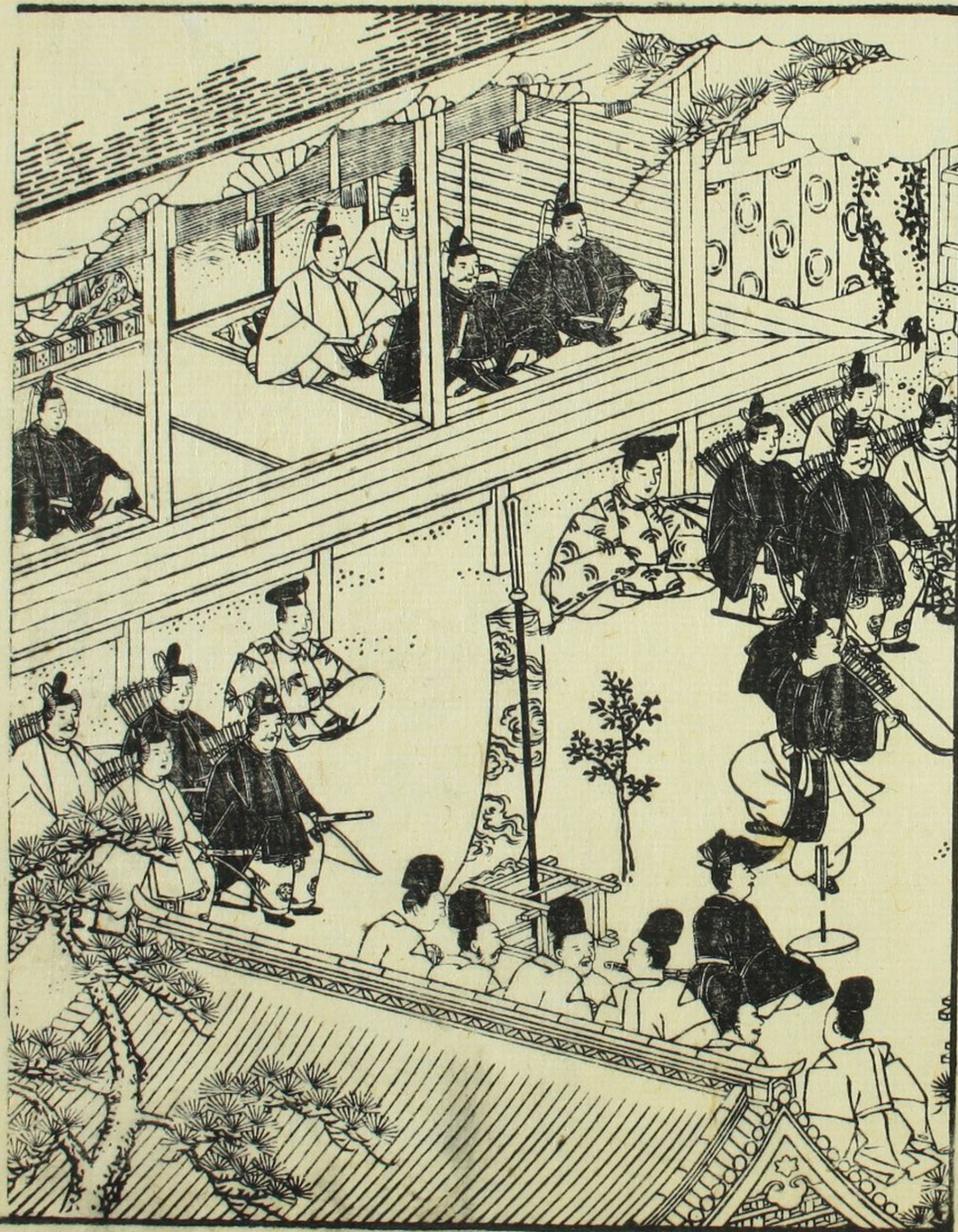
都の花のさかきりあはれなるをさかきりあはれなるを 日

伊勢のあはれなる花の御ははれなるをさかきり 日

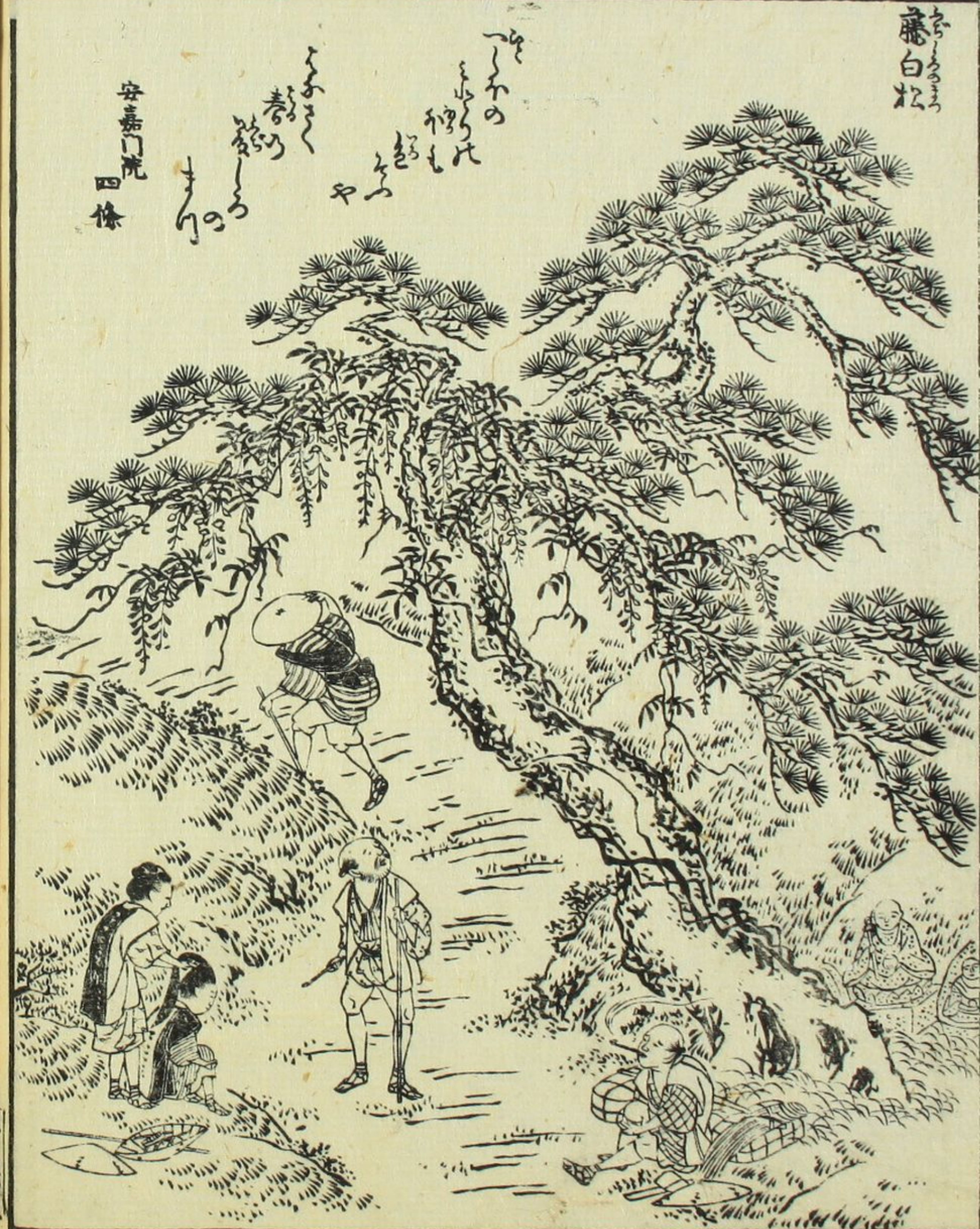
あはれなる花の御ははれなるをさかきりあはれなるを 日

あはれなる花の御ははれなるをさかきりあはれなるを 日

あはれなる花の御ははれなるをさかきりあはれなるを 日



藤白松



皇太后少進  
及原信綱

日

右馬助源朝臣  
家長

日

右原信範

日あたるの松の梢は白葉色も目好しとてやうり耶  
 風素とちりし海まのりぬ長ゆるもる月あはれをり  
 ふるふれれのみさのい後たのむなまけりかを  
 百千鳥と身の後たのむ月すむのたをすん  
 ねいしゆの海のたのむのたのむのたのむのたのむ  
 塩風やぬ上の日にあはれをりやうりやうりやうり  
 石の居 徳臨憶兆分。實天六甲。秋九月日。永田拾菴思達謹誌。中道女左門村創立又舊より  
 當社の鎮座あり久遠をりいふと對の帝王然好のんぐ  
 行幸ありしことも然るゆゆと難けりて本代后妃夫人  
 のあふこに訪訪りてあはれもいふ久矣四年の清の二年  
 文明十二年八月十八年を長六年の梅元石古帖ちなは  
 御幸記曰き御東の若きもの行りゆり山まきく九十九  
 所の王子社を建てし御幸の御想所とてたす

延和之所大權現の遷拜の地ありとせ

延和日やいおくるる九十九所

鯉風

藤白王子

松山宮大御所中送寺

延和十面載世者

延和十面載世者 延和十面載世者 延和十面載世者

友白津坂

藤白之三板乎越跡白旗之我長于者所泊香裳

無名

友代之三板乎越跡白旗之我長于者所泊香裳

傳心新

新千 友代之三板乎越跡白旗之我長于者所泊香裳

よみ金丸

新後 友代之三板乎越跡白旗之我長于者所泊香裳

お大酒公彦

夫本 友代之三板乎越跡白旗之我長于者所泊香裳

お上天皇

日

友白のの三板とてんあはまらあはらう吹上のる

日

延和

を自よあまのつれ風の吹上る浪も出る月あり

雅

延和

暮のつれ後まはら代の三板とてんあはまらあはらう吹上のる

為久々

日本紀齊明天皇二年秋九月有間皇子性點陽狂之往

年事温湯修療病未讚國體勢曰繞觀彼地病自蠲消

天皇聞悅思欲往觀之四年冬十月庚戌朔甲子幸紀温湯

十月庚辰朔壬午留守宮藤我赤兄臣詰有間皇子曰天皇所知政事

有失矣大起倉庫積聚民財也長安身渠水損費公糧二也其石

於舟運積為丘三也有間皇子乃知赤兄之善已而欣然報答之曰昔

年始可用兵時矣甲申有間皇子上赤兄家登樓而謀夾膝自斷

於是和相之不祥俱盟而止宿夜半赤兄遣物部朴井連輔

率造宮丁圍有間皇子於市經如便遣驛使奏天皇所成子

捉有間皇子一十九歲送紀温湯之於是皇太子親



問者問皇子曰。何故謀人。答曰。天与赤兄知。吾王不祥。庚寅。綏有間。皇子於藤白坂云。

此所取上古春。明天皇年。夢の温湯。下幸。幸。比有間。白皇子。蘇我赤兄臣。以謀。天皇を就。い。ま。の。せん。く。く。の。後。殺。した。あ。い。ら。地。を。る。は。紀。え。え。り。た。路。多。く。崎。嶇。を。た。嶺。下。りの。眺。望。し。ん。る。弱。浦。を。る。く。遠。く。だ。て。南。海。の。諸。州。目。下。に。棄。置。し。ん。る。の。凡。を。千。態。を。怪。奇。と。道。多。と。供。し。賜。目。と。る。ふ。多。接。暇。あ。る。は。若。白。巨。勢。が。今。も。是。の。に。登。臨。し。真。景。を。摸。り。ん。く。ま。た。た。よ。く。あ。ら。は。し。生。下。り。筆。を。投。し。奇。絶。と。嘆。び。く。や。た。の。七。成。を。ん。た。擲。筆。ね。く。く。あ。り。す。み。ら。り。そ。を。う。り。近。世。國。君。よ。う。く。瓜。た。く。く。瓜。標。と。う。く。あ。り。紀。人。謂。余。曰。藤。代。距。弱。浦。一。里。餘。其。凡。を。奇。南。海。道。

羅山詩集

諸州全在目下。若巨勢氏登此。將畫其壯觀。而不能之。遂輟翰于松下。俗所謂金岡棄筆松是也。余聞之。竊歎而不果。於是相像賦一絕。聞說紀州藤代峯。海南絕景目前供。人言詩是右聲畫。欲挂金岡棄筆松。

藤城

那波送圓

駐馬藤城望大洋。渺茫烟水洗愁腸。金岡擲筆雙松下。應似青蓮登岳陽。

藤城暖霽

嵐霽春深暖更龍。山容日霽轉朦朧。一痕黛色烟江杏。妝出文君明鏡中。

お取  
此の句は藤城の景を詠じたものと思われる。藤城は和歌山県にあり、その風景は古くから名勝地として知られていた。この詩は、春の深まるにつれて、嵐が晴れ、暖かくなる様子、そして山容が日に霽れ、朦朧とした光景が、文君の明鏡に映り出すように、藤城の風景が、まるで文君の姿に似ているように詠じている。

畫 圓



名代山

凡景の佳き  
なましろ

南紀黒江  
雲城

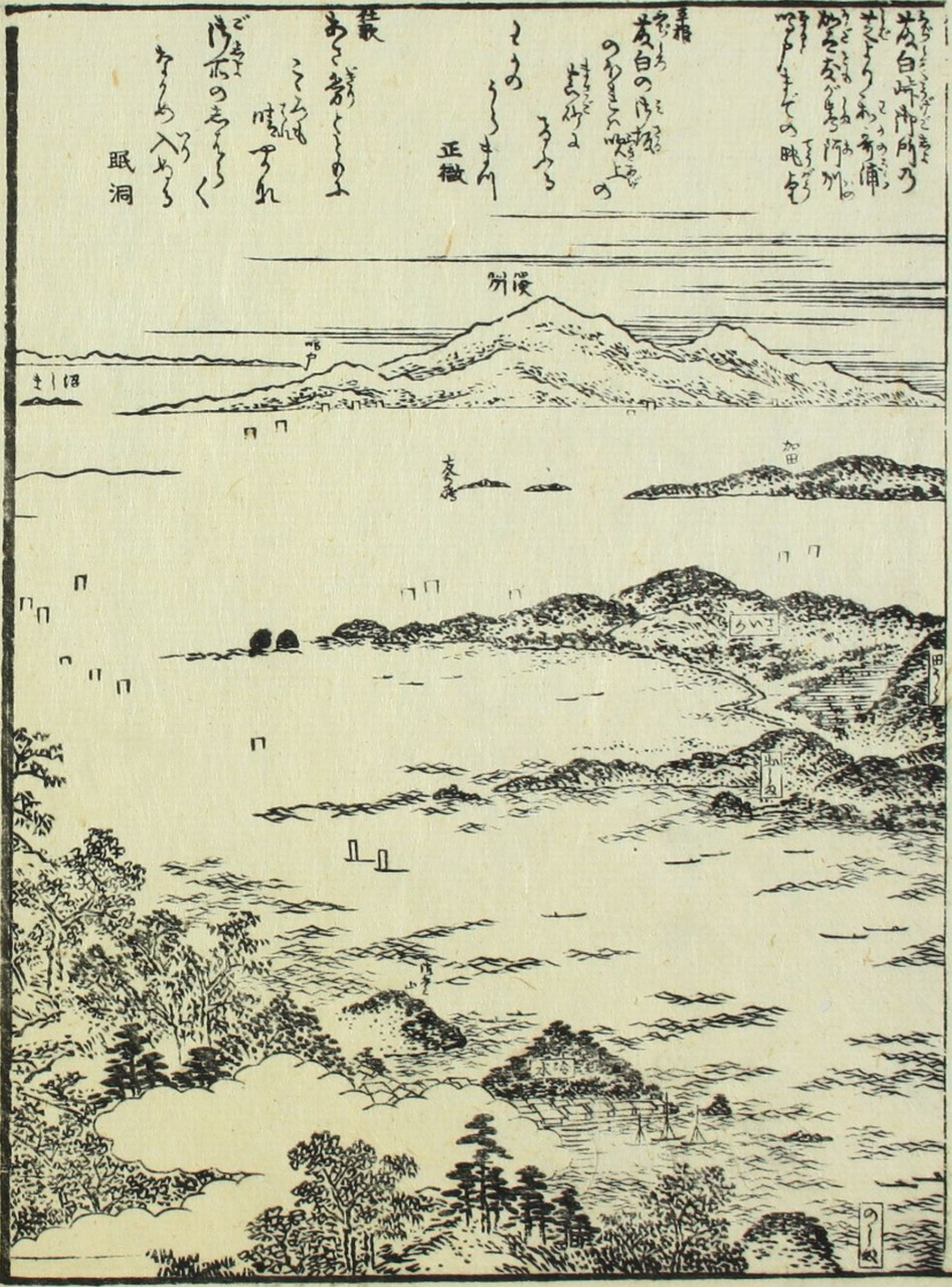
双石

入あ

次郎

名代山

名代山



名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃

名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃

名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃

名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃

名代山  
白崎所乃  
名代山  
白崎所乃

名代山

名代山

名代山

名代山

名代山

五十六

筆も各持するのほろりか  
ふくせやふくせゆんほろり

伊勢 千風

藤代堂

藤代山のそこのふくせゆんほろりか  
皇太子御誕生の御記に  
白くはせられたり  
夫木 御記のすゑに  
定 意

夫のさきをよるふんをよるあ  
白くはせられたり

藤白岡屋跡

藤白岡屋跡の御記  
比良屋山 西教院寺にぞり  
飯盛山 西教院寺にぞり  
今 低

比良屋山

飯盛山 西教院寺

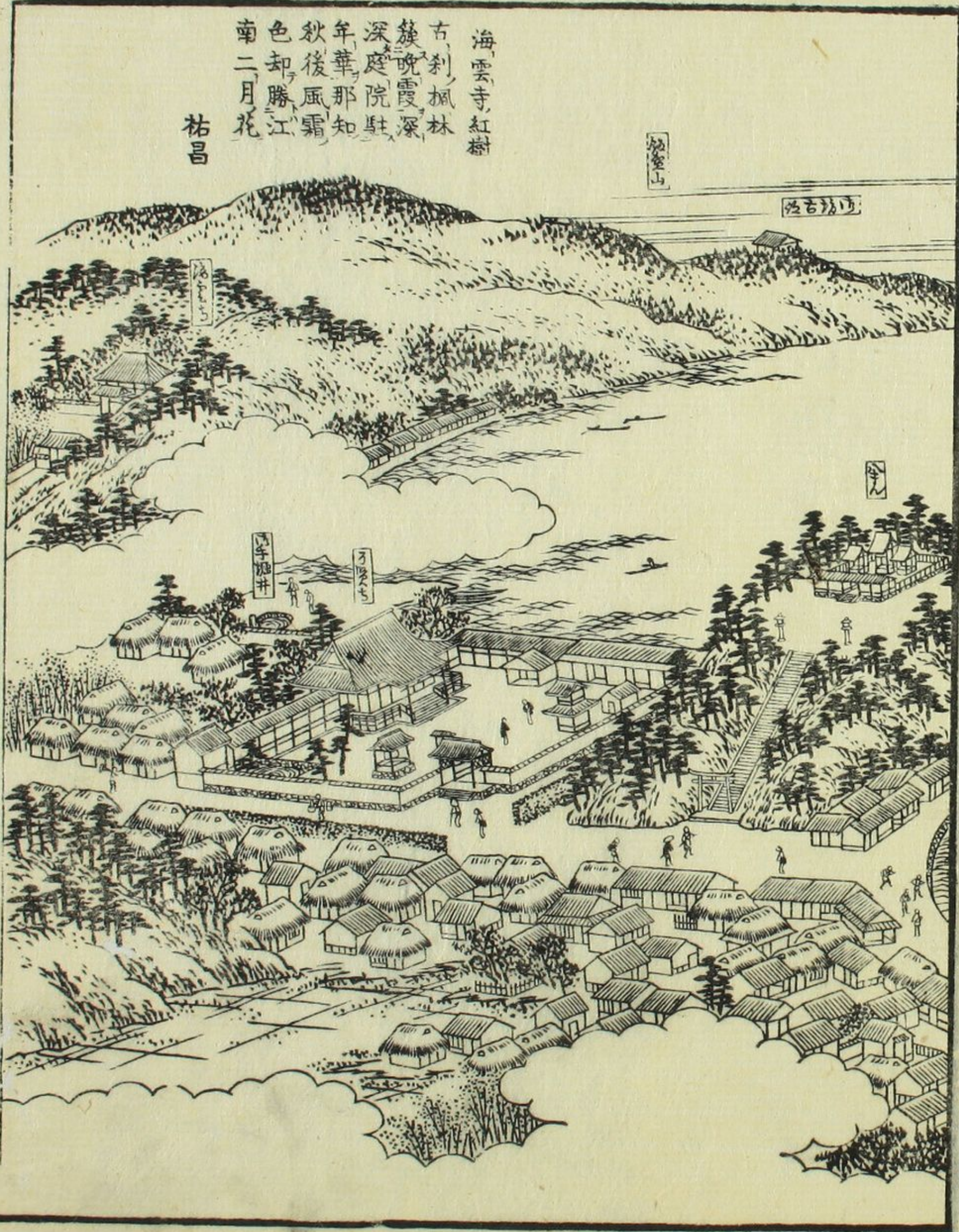
今 低

十月廿三日紀伊国各州の道場奉行也

抑違ふ本願寺第八世法印松大傍部大和尚位兼春孝如上人  
州創り文の八年春蓮如上人所内国出づり  
の二子修初小病ありあり終に身ゆり  
咽び泣き涙も垂れ喚ぶと泣き  
いづやと涙世に母の瓜腹に  
涙ももめん  
身も電一 百日に満ちる  
おせん 無大生告白海より  
る 曼曼の屋の  
のほろり  
らん 初来の傍を相待 善後 の要路  
る 曼曼の屋の

よりて豊朝より赤白峠は昔こころをすくみ果しては五のあり  
たしむるをいまはよきまをて救世の昔今ほあひまうら  
る徳を徳傍にまの昔を教へたはひりりりりりりりり  
念の命のまをて受む〜あまのまをていひまをていひりりり  
とてまの徳傍にまをていひまをていひりりりりりりりり  
鎮の〜あまのまをていひまをていひりりりりりりりり  
よる〜まをていひまをていひりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
徳傍にまをていひまをていひりりりりりりりりりりりり  
老人を〜まをていひまをていひりりりりりりりりりりりり  
傍のまをていひまをていひりりりりりりりりりりりりりり  
たまのまをていひまをていひりりりりりりりりりりりり  
まをていひまをていひりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

眼下にわが浦の傍にまをていひりりりりりりりりりりりり  
を神傍のまをていひりりりりりりりりりりりりりりりり  
唱まをていひりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
相傍にまをていひりりりりりりりりりりりりりりりりり  
うらなまをていひりりりりりりりりりりりりりりりりり  
有世河林陀佛 亦陀如来  
〜神手報とらりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
まをていひりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
力を鎮のまをていひりりりりりりりりりりりりりりりり  
ぬ〜まをていひりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
の〜南紀のまをていひりりりりりりりりりりりりりりりり  
者乃教のまをていひりりりりりりりりりりりりりりりりり  
〜まをていひりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり



海雲寺紅樹  
 古刹楓林  
 深院霞深  
 年華那知  
 秋後風霜  
 色却勝江  
 南二月花

枯昌

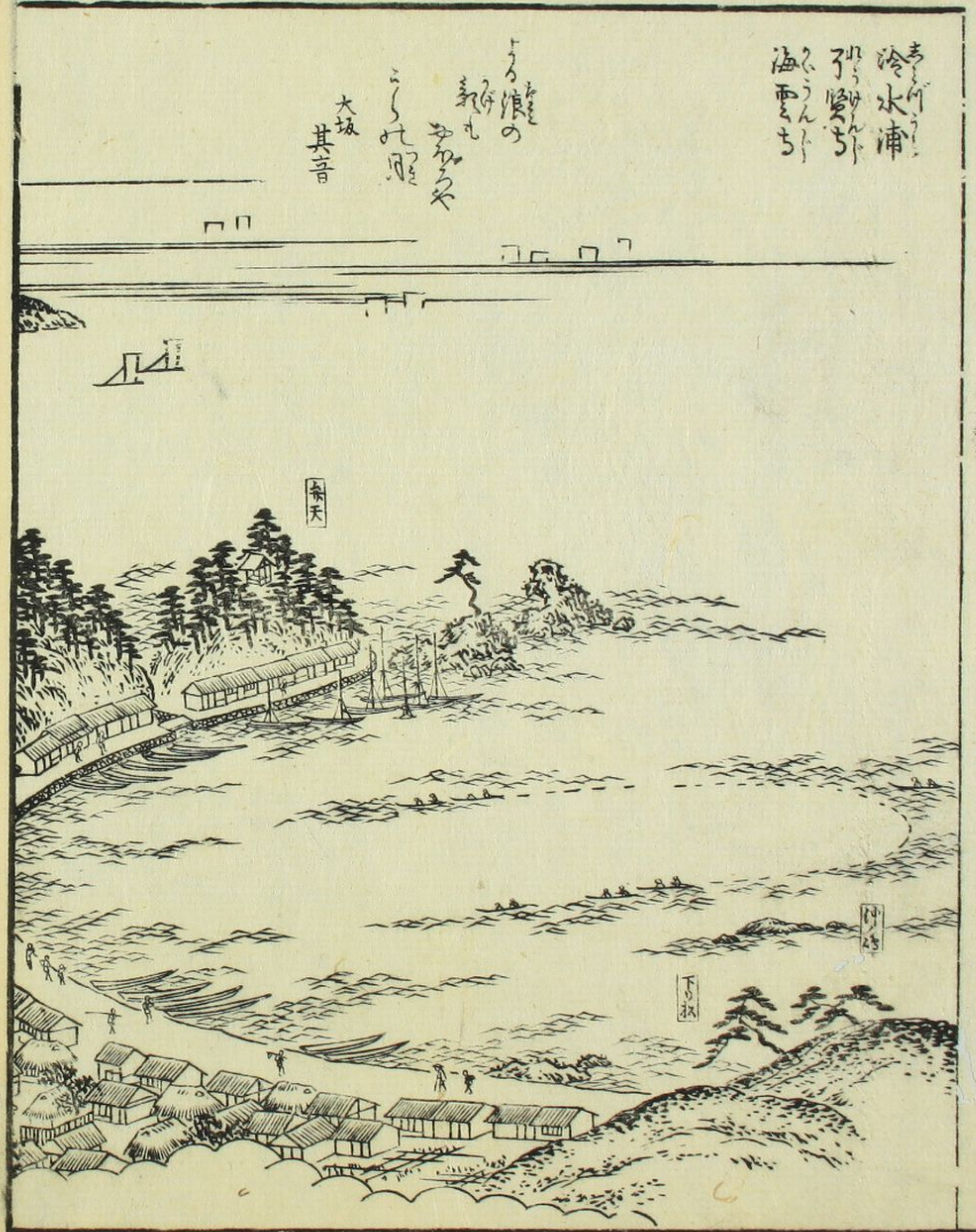
妙聖山

妙聖山

今

字池井

字池井



冷水浦  
 引船  
 海雲寺

大坂  
 其音  
 此照  
 新也  
 其音

奈天

下

たに陽気とあまふく廿日〜何れへゆ〜たかひんれい  
急れこごを念〜道場〜山林とよを飯堂と  
少〜西〜に造建〜山〜其の冬十月子  
連と土の南と何れ出〜上人〜空門  
莊内小元儀〜日越〜未道場  
冥徳の沖影〜もあ〜心〜  
とふら自四の沖影と知〜たま〜曰〜富田教  
あとのあをれより函〜あ影とら幸海  
とせん〜局座〜真身と漆とせり九字十字并二  
尊像乃裏とと〜終ら  
寺裏書ふ曰

釋蓮如判

大谷本願寺親寫西人沖影

此沖影攝洲嶋上郡富田教行寺堂位也  
雖然外紀紀州阿間郡清水道場と尊  
定之物也

文明八年 丙申十月廿九日

願主釋了賢

是尚(第一)の靈堂とらん今時終身沖影と各だとの  
はら文の十八年三月八日泉州坊浦より法華あり日  
根那海生寺にら着〜たあ〜ま〜  
十日に黒江の濱よりふひれのう〜詠〜  
中〜當浦と考〜あ〜沖影法像と勸〜あ〜  
位〜口外の内大物のあ〜はと〜上〜









海天香露曉  
 茫茫裏橫  
 構長漠北弄  
 傀個子宮中  
 得返魂香橋  
 織女何勞  
 動仙人忽吐  
 若使廣陵  
 出技乘七  
 程光  
 修更

山

有明

山



素津  
 塩津  
 蛭子社  
 觀音堂  
 敷網

山

山

山

とや此彈利きまらけりは海船の清月彈にぞ思し  
後少翠の魏く〜〜〜帯を捲く〜〜〜美後の巻中  
白梅あり早暮あつちの谷〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
香陽のつとせむあり

塩津の淺

西のくにあり

此山門のこゝろは灣とあり〜〜〜自然を遊べりもたれり  
あしは生来の商船はひら〜〜〜淺く泊り船はたつ  
下とと港口のぬれぬの商戸簷とほ〜〜〜ぬ其繁華をさ  
大都會にも減る〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
贈月より未の敷網とあり〜〜〜  
鯛鮓のぬれぬ魚とあり〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
因に日明和五年秋備清後建省陳長運とあり〜〜〜  
御座り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
まう詩はめ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

謝

歩難行千里外。在他郷未得回。  
詠誰家好美酒。得君王賜三盃。

淇後紙園師接先南海先生  
國君の命と奉〜〜〜教を授けあり〜〜〜後肥の長とれたる〜〜〜にねんそ  
師接先生詩は〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜

贈揚金生

養霞紙師接

兼葉之露霞葉霜離魂秋寒水一方。人間愁苦  
無至別渭樹江雲古斷腸。与君相識未相親一別此生  
兩茫茫。言不可通情可通多情觸物夢魂長一鐘敲月  
寒山曉不意相憶倚塗床。

又

悲山然水送路多。多情欲説口氣氣。氣憐君後く  
逢定是。教入武吏曲〜〜〜

蛭子神法同うらあり 志社 八幡大菩薩 空母神  
慈眼山世量院神宮寺  
を徳子の傑作 大師也  
八ヶ月八寸



